



日本宣教ニュース

NO. 3 2015年1月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」（コロサイ 1：6）

【巻頭言】

「日本宣教の勘どころ」

共立基督教研究所長 稲垣久和

今回の「日本宣教ニュース」は今までと異なって他宗教の動きも載せています。これは新しい試みであり、日本では特に大事だと思いました。と言うのは、キリスト教宣教には150年（キリシタン時代からは460年）以上の歴史があるにもかかわらず実質信者数が総人口の1%という理由の一つが、民衆の霊性の基層に仏教や神道の強い影響があるからだと思われるのです。そして仏教や神道の説く“救い”と重なっているところがキリスト教にあるにしても、それとは別の次元がキリスト教の中にある、これは他宗教との比較の中でしか判らないからです。キリスト教の特徴を一口で言えば「人格神への応答」（責任）ということになるでしょう。この科学の時代に、聖書的人格神が創造から終末までの“大きな物語”を導いているというキリスト教の主張はあまりに驚きであります。その真ん中に位置している十字架の“贖罪愛”はまさに中心であり、文化形成の面のみならず、倫理面での「他者への愛」がキリスト教の“責任”の主だった内容だと思われるのです。

この“責任”は生命の原理であり、コミュニティ生活において自治をもたらすものです。日本の歴史を見て思うのは日本人、日本文化には良質な面が多々あるのですが、自治の面で大きな弱点を持っているのではないかということです。自治による連帯が弱いと“力”に抵抗できません。近現代での“力”といえば、一方には政治権力、他方には貨幣の力（市場主義）ということになるのですが、ますます私たちの生活世界を侵食し続けています。私は、政治権力は適切にコントロールされれば悪ではないと思っています。ただ、自治の力が弱いところではそれが“お上”からの強固な統治権力となります。必要なのは統治ではなく自治です。市場もまた人間生活に欠くべからざるものですが、自治の力が弱いところでは市場は人間のモラルを破壊していく力へと変貌していきます（すべて金で解決！）。賀川豊彦が“贖罪愛”から推進した協同組合運動はこの自治の力へのヒントを与えています。教会がその使命（ミッション＝宣教）を地域にあって果たしていくとは「他者への愛」と連帯を自ら証しする、ということではないでしょうか。福音を包括的に生きる訓練を通して自治の力を育むこと、それが今日の私たちに要求されていることだと思うのです。



【JMRレポート】

9～12月の期間、各地で講演会やセミナー、シンポジウム等が数多く開催されています。既に、クリスチャン新聞やキリスト新聞等でも報道されており、重複する部分もあるかと思いますが、それらの中からJMRとしてのレポートを掲載いたします。

また、他宗教に関する情報として、宗教情報リサーチセンター発行の『ラク便り』から、目についたものをピックアップして転載させていただきます。（記 柴田初男）

◆「日本ローザンヌ委員会主催シンポジウム」◆ 「包括的な日本宣教を考える」Vol. 4

1. 日 時：2014年11月8日（金）13:30～16:30
2. 場 所：お茶の水クリスチャン・センター8F
3. テーマ：キリストの教会を「謙遜と誠実と質素」へと呼び戻す
4. 内 容：

発題者：マイケル・オー（国際ローザンヌ運動総裁）「神学、性、ミニストリーの領域での誠実さ」

応答者：田中牧子（キリスト者学生会主事）「大学生伝道の現場から」

応答者：渡部 信（日本聖書協会総主事）「世界の教職者たちとの出会いから」

『謙遜(Humility)、誠実(Integrity)、質素(Simplicity)』は、ローザンヌ運動の中心的な価値観を表す言葉で、英語ではそれぞれの頭文字をとりHISと表現しています。私たちは、性の混乱、権力、成功、そして物質的欲望を偶像化する危険にさらされています。あなたもこの機会に神の《HIS》のもとに来て、セルフチェックをしてみませんか？

これは、当該シンポジウムの開催案内のチラシに記された文章である。現在、世界中の教会やミニストリーで、教職者の不祥事やスキャンダルが多発しています。

第3回ローザンヌ世界宣教会議（ケープタウン2010）で、神学委員長のクリス・ライト氏が最も激しく、名指しで批判したのが「繁栄の福音」についてだった。その背景には、キリスト信仰の真実性が台なしにされかねないほどに、今日「繁栄の福音」が世界の教会に多大な影響を及ぼしている、という危機感がうかがえる。

そして、クリス・ライト氏は「世界宣教を妨げているのは他宗教でも迫害でもない。福音にはそれらを突破する力があるが、神の民がその召しに生きていないことが問題だ」と指摘し、力や成功を求める今日の「繁栄の福音」の傾向を「欲望を神とする偶像礼拝」と厳しく戒めた、とクリスチャン新聞は報じています。（2012年7月22日、8月12日付）

このような背景を踏まえ、シンポジウムの基調講演に立ったマイケル・オー氏は、<ローマ12:1-2>から、次のように語った。

- ・全ての教会にキリストに似たリーダーが必要。福音は特異性を教会に要求する。他の人たちとはっきり異なる歩みをする。聖書的な生き方なしに聖書的な宣教はない。
- ・福音宣教の最大の障壁は、神の民が神の民としての歩みに失敗していること。世界宣教の一番の脅威になっているのは、教会であり、教会のリーダー。外の人々の罪や生き方に敏感になることより、教会の中や、自分自身の中に起こっている心の問題にもっと敏感にならなくてはならない。
- ・この世に順応し、従属した生き方をする時、私たちは誠実さ、純潔さを失うことになる。私たち自身が、まず悔い改めへと促されなければならない。

- ・聖くなるための犠牲、そのみが神に受け入れられる犠牲。今日聖職者の中に性的なスキャンダルや混乱が繰り返されている。それによって失われたミニストリーがいかにか多いことか。リーダーには聖さの追究が不可欠。罪を悔い改め、告白して勝利を得るか、それとも罪を隠し、偽善的に生きるかが問われる。
- ・純潔を失ったリーダーが、偽善でいつづけることができるのは、それなりに専門的な組織管理能力や戦略があれば、ミニストリーの実を結ぶことができると思っているから。このような、真の悔い改めから離れて成功しているミニストリーがあることは、クリスチャンのリーダーシップにとってスキャンダラスなこと。しかし、それらは一見霊的に祝福されているかに見えたとしても、決して世の光としてはなりえないものである。
- ・性的な誠実さとともに、神学的な誠実さが必要。神学的な欠如により全ての問題が起こる。教理より愛だ、実践だというのは間違い。神のみ心が何かをわきまえ知ることが重要。愛は識別力のあるものでなければならぬ。悪を憎むことができないのは罪である。
- ・「繁栄の福音」や異端の弁別ができるよう、教会での神学的な学びが必要。みことばの学びによって心を一新され、異端を見分ける力をつけること。

基調講演に対する応答として、初めに田中牧子氏が、K G Kにおける神学的な学びの取り組みや、神の前に誠実に歩むための学生同士の交わりの実践について語った。

次いで、渡部信氏が応答し、次のようなことを語った。

- ・最近行われた各国の聖書協会代表者の集まりで、現代のキリスト教会の状況を表すデータとして、次のような報告があった。各国の聖書の頒布状況は、ペンテコステが盛んなブラジルでは年間800万冊、韓国、中国は200万冊、米国は50万冊、イギリスは5万冊であった。また、欧米では伝統的な大会堂でも礼拝する人は50人位という状況。また、アフリカは頭打ちになってきたが、インドネシアやインド、中国等アジアでは信徒数が伸びている。全般的にエキュメニカルな動きが活発化している。福音派は横ばい状況だが、まだ新しい動きを起こす力があるようだが分派的な活動が多い。
- ・伝統的な教会が振るわない原因として、①同性愛の問題、②未信者の聖餐式への参加問題、③教職者の不祥事やスキャンダル等があげられるが、教会で語られる言葉が、行いが伴わない死んだ言葉になっていることが大きい。それを青年たちが見ている。
- ・宣教師の熱心な働きによってできたミッションスクールや神学校の教育の問題。アカデミックな学びとなり、立教や西南学院、同志社等には、ノンクリスチャンも入っている。ローザンヌ運動は、それらをもう一度原点に取り戻す運動でもあるのではないか。
- ・教会の混乱や不祥事の根本には、本当の福音が語られているか、聖書を深く理解しているか、イエス・キリストのメッセージが真に語られているかの問題がある。
- ・ローザンヌ運動のH I Sは、既存の教会へのインパクトとなる。もっと既存の教会へ広げて、日本宣教のうねりとなる運動になるように期待したい。ペンテコステやカリスマ運動を一概に否定しないで、互いに手を結ぶことやカトリックとの連携も必要ではないか。

この後、テーブル毎に分かれて、次のようなテーマについて話し合いがなされた。

(1) 自分のあり方を振り返り、自分が関わっている人々との間で「誠実」をどう考え、どう行動していくかを考えて見ましょう。

(2) 世代による「誠実」のとらえ方の違いを述べ、相互に理解しましょう。

会場からは、【integrity】の訳としての「誠実」が、今少し分かりづらいとの意見もあったが、オー氏は「誠実」の反対語は「偽善」(マスクをかぶる)だとし、「誠実」は偽りが無いこと(ローマ12:9)だと述べた。

*シンポジウムの講演及び応答の音声ファイルがローザンヌ運動のウェブサイト(シンポジウムレポート)に公開されています。 <http://www.lausanne-japan.org/>

【参考】

P. F. ドラッカーは『マネジメント』で、マネジャーに必要な資質として次のように述べている。

「マネジャーは、人という特殊な資源とともに仕事をする。人は、ともに働く者に特別の資質を要求する。人を管理する能力、議長役や面接の能力を学ぶことはできる。管理体制、昇進制度、報奨制度を通じて人材開発に有効な方策を講ずることもできる。だがそれだけでは十分ではない。根本的な資質が必要である。真摯さである。最近では、愛想よくすること、人を助けること、人付き合いをよくすることが、マネジャーの資質として重視されている。そのようなことで十分なはずがない。事実、うまくいっている組織には、必ず一人は、手をとって助けもせず、人付き合いもよくないボスがいる。この種のボスは、とっつきにくく気難しく、わがままなくせに、しばしば誰よりも多くの人を育てる。好かれている者よりも尊敬を集める。一流の仕事を要求し、自らにも要求する。基準を高く定め、それを守ることを期待する。何が正しいかだけを考え、誰が正しいかを考えない。真摯さよりも知的な能力を評価したりはしない。(中略)

マネジャーの仕事は、体系的な分析の対象となる。マネジャーにできなければならないことは、そのほとんどが教えられなくとも学ぶことはできる。しかし、学ぶことのできない資質、後天的に獲得することのできない資質、始めから身につけていなければならない資質が、一つだけある。才能ではない。真摯さである。」(『マネジメント』より)

ドラッカーがここで言っている「真摯さ」が【integrity】であり、それはまた言動が一貫している「一貫性」や、「言行一致」であることが「真摯さ」【integrity】の根幹をなすことだということである。

◆ C-BTE 仙台バプテスト神学校 創立50周年記念 ◆

「いかに次世代を育成するか」

◎ 2014年10月6日(月)～8日(水)に、C-BTE 仙台バプテスト神学校において開催された C-BTE (Church Based Theological Education) セミナーと記念講演、シンポジウム、ワークショップの中から、記念講演について、講演者のご了解のもと、講演のレジメ・抜粋を掲載させていただきます。

A 記念講演1： 「次世代育成の緊急性と今日的課題」 廣瀬 薫氏(東京キリスト教学園理事長)

I 「次世代育成」：神の国を造る人材を

1. 『日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか』

(1) 日本の教会がキリストの心を具体化していない教会であったから。

⇒ 教会に「ああ、これが神の国だ」という感動が足りない。

(2) 牧師・指導者(長老・役員・執事たち)が未熟であったから。

⇒ 「信徒を活かす」ことが足りない。

(3) クリスマンを含めた日本人が島国的劣等感の束縛から解放されていないから。

⇒ 「日本を活かすこと」が足りない。

◎ 「福音宣教のゴールを目指して」

(1) 「神の国」を現す。

① いわゆる3類型の内「神の国」を強化する。

② 教会中心思考が、神の国への取り組みを妨げている。

(2) 「人を活かす」ことを目指す。

① 信徒を活かすことを優先的に目指す。

②「キリスト教世界観」を土台に置くことが大切。

(3)「日本」を活かす福音を。

①創造→完成の軸をしっかりと持つ。

(結) 聖書的「キリスト教世界観」に立つ教会の刷新を

2.「キリスト教世界観」とはどういうものか。

①創造 ②墮罪 ③回復(救い) ④完成 の4ポイントの枠組み。

<まとめ1>・3ポイントでなく4ポイント：救われた「後」の人生の尊い価値を提示する。

<まとめ2>・皆が・活かされて・喜ぶ「神の国」：今の社会は、誰かの喜びのために誰かが泣かされている。

<まとめ3>・キリスト教の3類型「神の国型」「信仰義認型」「教会型」：3つとも備えたバランスを。

3. 次世代育成を考える

(1)教会は祝福の拠点である：次世代育成の拠点。包括的宣教理解とその実践(宣教・教育・奉仕)を。

(2)「次世代育成」の目的は何か：教会のためではなく、青年が神の国に活かされて喜ぶため

(3)教会の刷新・悔い改めが必要：第4回JEA宣教推進会議決意表明。(2001年)
「私たちは伝道と教会形成において、あまりにも大人中心に考え、子どもや青年たちの尊厳や可能性を受け止めることができないで来たことを悔い改める。」

II 「緊急性」：私たち自身の課題として。

1. 今、国家主義的セットが着々と進められている：人(神のかたち)を活かす「神の国」ではなく、「地の国」のために人を犠牲にする動き。

①靖国神社公式参拝 ②教育基本法改正 ③教育現場での日の丸君が代の強制

④特定秘密保護法 ⑤自民党の憲法改正案 ⑥日韓日中日露の領土問題

⑦特に日韓日中の関係悪化 ⑧憲法9条の扱い(集団的自衛権等) ⑨従軍慰安婦・河野談話 ⑩原発再稼働 ⑪歴史観(戦後レジュームからの脱却)

2. かつて「神の国」を言わなくなった教会。今も言わないままではないか。

*賀川豊彦の「神の国運動」とその後の時代の流れを考える。

関東大震災：1923年 神の国運動：1928年～(4年半)

734日、1,859集会、78万人、62,000枚決心カード、受洗者1万/年増

「その時代の教会側は、決心者を受け入れる可能性は少なかった」(黒田)

その後、日本の教会は「神の国」を言わなくなる。

3. 私たちが、今、ここで、御心を実践して実を結ぶ。

(1)それは私たちに出来るのか?⇒ 人の力では出来ないが、聖霊によって出来る。

(2)賀川の実践例。①「神の国運動」、②幼児教育、③救済事業、④救霊団事業、⑤労働運動、⑥社会運動、⑦農民運動、⑧災害救援活動、⑨協同組合運動、⑩保険・共済事業、⑪平和運動、⑫著作活動

(3)完成に向けて活かす実践について：三位一体の神様による信仰生活

救霊の熱源(パッション)、神の国を造る実践(ミッション)、御心を受け止める希望(ビジョン)を。

III 「今日的課題」(私たちの課題を考える)

1. 協働体を形成して実践する。

(1)都会・地方の協働 → 地域宣教の神学

(2)教団・教派・キリスト教学校・キリスト教団体の協働 → 超教派(協教派)、福音主義エキュメニカル、団体の協働

(3)教会・神学校の協働 → グライダー人間ではなく、飛行機人間を育成する。

飛行機人間(イザヤ40:31)：個人伝道、教会形成、神の国建設が出来る信徒の育成。

それには教会と神学教育の協働が必要。

2. 互いを活かす実践は「贖罪の実践」＝十字架を担う生き方（ルカ9:23）

(1)内村鑑三「贖罪の弁証」：善行は全て贖罪的特性を持っている。私達もまた、私達よりも、より弱い、より貧しい者のために、その贖い主とならなければならない。

(2)賀川豊彦「贖罪愛」：イエス・キリスト＝「人格的白血球運動者」

(3)羽仁もと子「神の国建設」：十字架＝神様から預けられた力を差し出して世の罪を担う生き方。

(4)M. L. キング「私には喜びがある」：自ら招かざる苦難は贖罪であると信じて闘い続けよう。

3. C-BTEに期待すること

(1)信徒育成 → 牧師養成、神学者育成まで

(2)教会育成 → 神の国の協働体形成まで

(3)聖書的原理 ⇒ 教会史、プロテスタント史、日本キリスト教史を含む視野を

B 記念講演2： 「統計から読み解く次世代育成の今日的課題」 根田祥一氏（クリスチャン新聞編集顧問）

I データブック『宣教の革新を求めて－データから見る日本の教会の現状と課題－』
（東京基督教大学国際宣教センター、2012）

および『クリスチャン情報ブック2014』（クリスチャン新聞、2013）から

1. 注目すべきデータは何か？

(1)礼拝出席者数20-30人の教会が圧倒的多数（66%）を占め、牧師、信徒とも高齢化が進んでいる。

①平均礼拝出席数の実態

②教会数増加の実態

③人口減少時代に突入した今日の教会減少傾向

④無牧、兼牧の増加（過疎地に顕著）

(2)都市と地方の地域間格差

<参考資料> アピール「全教会の課題としての地方伝道」（第5回日本伝道会議「地方伝道」プロジェクト）

II 『日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか』（いのちのことば社、2012）の問題提起から。「ホーリスティックな福音宣教を目指して」（根田提言より抜粋）

1. キリストの心を具体化していない教会

「キリストの心を具体化していない」という大きな表札の下には、「人間中心が教会を支配している」「信徒の信仰が生活化していない」という2つの要素がある。

日本のプロテスタント宣教の歴史において、教会は神の心に適うことに増して、かなりのウエイトを“日本”から認められることに置いてきた。真理を貫くことよりも和をもって尊しとする日本社会に、唯一の神のみを主と告白する信仰を根付かせようとする困難さがそこにある。すなわち、キリストの心を具現化するというようなことは、表向き（建前）としては言ったとしても、その実質（本音）では相対的に軽く扱われ、反対に世間から認知されるか否かの比重が大きくなる。キリスト教が日本社会の一員として市民権を得るとい実質的な利を過大評価し追い求めていくうちに、本質が骨抜きにされてしまう危うさを、この国の福音宣教はそもそも内包している。

戦前においては、それが「お上」「国体」であった。キリスト教が「お国」から一人前の宗教として認知されることが日本の教会の悲願となり、いつしか至上命題のように錯覚されてきた。教会の主であるお方を真に「主」とすることよりも、人々に受け入れられること、世間から評価されることのほうをより重んじる体質が染みついていった。

その帰結が、軍国主義日本の国策に迎合する、換骨奪胎された惨めな教会であった。

この迎合体質は、戦後の教会にも形を変えて受け継がれてきている。「マーケティング」というスマートな衣に装いを變えて、いわく「人々のニーズに応える」「地域社会から認められる」教会の形成を追い求めていく姿勢の中に、「キリストの心を具体化」することよりも、人々に受ける人気取りの邪念が紛れ込んで優先されてはいないか。

他方、「キリストの心を具体化していない」という大きな表札に関わるもう一つの要素である「信徒の信仰が生活化していない」とは、現実問題に対応できない、聖書的世界観の未確立、福音理解の貧しさ、牧師中心で信徒が活かされていない個人主義など。この中には、最終結論で「牧師・指導者が未熟だった」と分類された要素も入っている。

2. 牧師・指導者が未熟

指導者の資質・未熟や、説教が貧しいなど、牧師のあり方への批判的な見方は、これまでも繰り返し言われてきた。だがそれは裏を返せば、そこに 牧師の役割を過大視し、何でも問題の責任を牧師に押しつけようとする信徒の牧師依存体質 が潜んでいる。つまり 信徒が自立した信仰者として成熟していない。 その意味で、まさに「信徒の信仰が生活化していない」のである。そのことは半面、信仰が生活に根を下ろした成熟した信徒像を描き、かつ実際にそのような信徒を育成することを重視してこなかった 教会の問題でもある。従順に忠実に「牧師に仕える」信徒を安易につくることで、安定した教会の秩序を築いているかのような思い違いをしてきたツケを、私たちは払っているのだ。

日本の教会の牧師依存体質は、監督制・長老制・会衆制といった教会政治の違いにかかわらず根深い。牧師への度を越えた依存感情が、牧師崇拜の不健全な権威主義的体質の蔓延を許し助長してきてしまった背景にある。 それはまた、何か問題が生じれば牧師への度を越えた責任転嫁や牧師批判にもつながる。

このジレンマを打破するには、牧師も信徒も含めたすべてのキリスト者が、神の前に一人ひとり 責任主体として自立して生きられるように、真に聖書的な人間観・神観・世界観を身に付けていくほかない。 そのためには、ものの見方も生き方も、ものごとを判断する際の基準も、すべてを聖書そのものから聴き取り、その示すところに従っていく（キリストの心を具体化する）ことが不可欠だ。私たちはあまりにも、西欧思想のパラダイムで規定された「キリスト教」の伝統や常識、あるいは日本人性・日本文化に足を取られたような「教会」の伝統や常識に縛られてきたのではないか。そのような人間的な恣意が築いた縄目から解放してくれるものは、神のことば＝聖書以外にない。 あの問題、この課題に対して、「聖書は何と言っているのか」「聖書はどう教えているのか」に、もっと意識的に耳を澄ませる必要がある。 そのためには神学校教育においても、従来どおりのやり方でいいのか、先入観を払拭して再点検する必要がある。 説教のあり方も、変革を迫られるかもしれない。 C-BTE の可能性に期待したい。

3. 日本という宣教の土壌の性質

この研究の最終結果の3つ目の柱、「島国的劣等感の束縛」という表札でまとめた分野は、一番目の「キリストの心を具体化していない教会」で指摘したような日本社会への迎合体質とどのように関わるのだろうか。あるいは2番目の項目「牧師・信徒が未熟」で扱ったような「聖書的な人間観・神観・世界観」を身につけさせることから阻害する要因なのだろうか。

この国でキリスト教がいつまでたっても「欧米のもの」というイメージを脱却できず、「日本の文化・精神性に根付かない不協和」を起こしていることは、多くの人々によって認識されてきた。日本文化と対立する西洋文化的なキリスト教という見方だ。ラベル

の中に、これを「ミスコミュニケーション」の問題と捉える見方もあった。「日本という宣教の土壌」の問題として立てると、どうしてもキリスト教の側にはいかんともしがたい外部的な環境要因としてイメージされる。だが、これを 日本とキリスト教とのコミュニケーションの不全と捉えると、どうしたらより良いコミュニケーションに変えていけるのかという展望も開かれてくる だろう。

この研究会が進められていたただ中の 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起こった。被災地の多くは東北の漁師町である。伝統的な因習も根強く、その中にある教会は懸命な努力にもかかわらず、いつまでたっても「よそ者」扱いをされ続けてきたような、典型的な「日本の宣教土壌」である。津波による甚大な被害が出た三陸沿岸部は、教会過疎と言われる東北の中でもとりわけ教会数が少なく、そもそも教会がない地域も多い。

その土壌が震災後の今、一変しつつある。教会の信者を増やそうという「伝道」の下心など計算する間もなく、家族や住むところも持ち物も一切を失った人々に懸命に仕えた諸教会では、イベントや宣伝によってではなく、地域住民が自発的に教会の集会に出席する事例が多く報告されている。これほど地域住民と心が通い合い、親しくなったことはなかったという「よそ者」の牧師の証言もある。南三陸町のように、これまで教会がなかった地域に、多くの教会やクリスチャンの団体が支援に駆けつけたことで信頼関係が築かれ、地元住民の要望で継続的な復興支援と教会活動のためのクリスチャンセンターが開設された例まである。そのあたり一帯は竜神信仰の根強い土地柄だが、クリスチャンの救援活動が「キリストが助けに来てくれた」という地元の評価につながり、地域住民にとって初めて「キリスト」の存在が「竜神」と並んだともいわれる。

キリスト者の側も、まず集会場所を設け礼拝を開始し……というような従来型の、いわゆる開拓伝道の常道が通用しない状況の中で、否応なく地域の人々と全人的（ホーリスティック）な関わりを持つ、それが結果として福音に耳を傾ける人々を生み出す、といったパラダイムシフトを余儀なくされている。

このような、東北の被災地において現在進行形で起こりつつある現象は、今までどうあがいても突き崩すことが困難と思われた、きわめて日本的な宣教の土壌であっても、コミュニケーションできる潜在的な可能性があることを示すものである。それは、これまで言葉で伝えようとしてきた「キリストの愛」が、そのキリストの愛に生かされ突き動かされたキリスト者たちの生き方と行動によって、見える形で表された ことによる。これまで相互理解が不能であるかのように思われたキリスト教と日本的共同体との接点が、震災という外形的なインパクトを経てつながったのだ。この前人未踏の宣教の経験が、やがて「日本」の土壌にのみ込まれていくのか、伝統宗教と一体となって相互扶助的な共同体システムとして地方に根付いている「講」に代わるような、地域共同体の全く新しい境地を切り開いていくことができるのかは、今後にかかっている。

1974 年のローザンヌ世界宣教会議以降、イエス・キリストの福音を単に魂の救いだけでなく、人間と世界のあらゆる領域に関わる「ホーリスティック（包括的）」なものと捉え直す理解が世界中の教会で受け入れられてきた。そして 1980 年代から 90 年代、福音宣教はアジア・アフリカ・ラテンアメリカで目覚ましく進展し、キリスト教の分布は西欧から非西欧へ、北半球から南半球へと劇的に塗り変わった。

それら福音が急速に浸透した地域の多くは、貧困や飢餓、戦火や難民、乳幼児の高い死亡率やエイズなどの深刻な病気など、現実の危機を抱えた地域である。そこへ福音が説教だけではなく、現実の危機に対応する救援活動や弱者・困窮者への支援と密接不可分に届けられていった。教会とキリスト者たちは、実際の行動を伴うホーリスティックな宣教を展開してきた。それらの地域では、キリストの福音は単なる教養の足しになるアクセサリのようなものではなく、自分たちの生死に関わる、まさに「いの

ちのことば」として響いたのではないだろうか。

翻って日本では経済的な繁栄の陰で、これまでそのような形で福音の本領を発揮できる局面が、皆無だったわけではないが見えにくかった。3.11後のこの国で、福音の魅力を真にホーリスティックなものとして人々に提供することができるかどうか…それは今までの「失敗」と向き合い、そこから次の一步への手がかりを掴むことができるかどうかにかかっている。

III 次世代の教会リーダーに期待すること

1. 1教会1牧師（家族）パラダイムの見直し
2. 牧師 vs. 信徒の固定観念の打破
3. 「同労者」によるミッションの遂行、「分かち合いの共同体」の建て上げ

急激な少子高齢化に伴い、無牧・兼牧はますます増えるだろう。だがそれは、1世紀のキリスト者が散らされたディアスポラのように、教会と宣教のあり方にパラダイムシフトを迫り、新局面を切り開くカギとなるかもしれない。これまで当然と思われてきた1教会1専任牧師のスタイルが成り立たない教会が増えてくる。1教会1牧師のパラダイムが転換を迫られれば、牧師が教えて信徒は教わるというような従来の固定観念は、必然的に打ち砕かれることになる。牧師がいなくても礼拝や諸集會を維持し、群れの中に起こってくる諸問題を 聖書に基づいて聖霊からの知恵によって処理していくような、成熟し自立した信徒の存在が不可欠となるだろう。単に専従の牧師を育成するためだけの神学校ではなく、伝道・牧会（ケア）・説教・教育・教会運営など、各自の賜物を活かして教会を建て上げていく信徒が必要とされる。まさに C-BTEの理念と目指すところは、このような時代状況の中で真価が発揮されるだろう。

今日、牧師が歪んだ権威主義的支配に陥る「カルト化」の問題は、もはや看過できないまでに教会を蝕んでいる。それは儒教的な忠君を基に師弟的人間関係に基づく武士道や天皇制の延長上に、無批判にキリストを接ぎ木して今日まで来てしまった日本の教会が、脱皮を求めて叫び声を上げているのではないか。もう一度、新約聖書の時代の教会とはどのようなものだったのか、牧師と信徒はどのような関係にあったのかを、聖書神学から捉え直す必要がある。教会共同体が、支配する者と服従する者という二極分化の歪みに捕われる以前の、「福音を分かち合う群れ」へと立て直されなければならない。

4. 開かれたマインド（異なる他者とのネットワーキングとパートナーシップ）
5. 教会堂に招く伝道→教会堂を出て社会と関わりを持つアウトリーチの必要
世界大の視野の広がり：教会とその宣教の広がり、世＝社会との関わり
6. 世の祝福に寄与する「神の国」を生きるアイデンティティ

「福音を分かち合う」体質への転換は、各個教会のみならず信仰共同体全体の性格に変化をもたらすだろう。関心や交わりが自教派・自国内に閉じこもるような日本の教会の内向き体質は、このままでは酸欠状態に陥って機能不全をきたしてしまう。他宗教の人々や地域社会と関わりを持つことに消極的なままでは、宣教のダイナミックな広がりは期待できない。教会に閉じこもって人々を招くことを「伝道」と思い込むような感覚から解放されるべきだ。囲いの外にいる人々に深い関心と関わりを持ったキリストの姿、世界の創造以来、世を愛し社会正義を求めてきた義と恵みの神に倣うならば、福音宣教を教勢の拡大と同一視するような矮小化は起きないはずだ。教会を通して世を祝福し、「御国の福音」を生きる、成熟したアイデンティティを備えた次世代の育成が待たれる。

【集会案内】

下記のような集会在予定されています。奮ってご参加くださるようご案内致します。

- ①被災地から学ぶ諸問題から、日本宣教の本質的な課題が浮き彫りにされてくるシンポジウムになると思います。(DRCnet事務局)
- ②日本の現代史において広範な社会事業を展開した賀川豊彦・ハル夫妻の足跡と思想を、21世紀の市民的公共性と公共福祉の視点から再検討し、今後の私たちの進むべき方向を探ろうとするものです。(Science for Ministry in Japan事務局)

東日本大震災4周年シンポジウム

3.11 震災から考える支援と宣教

東日本大震災から間もなく4年。支援活動に当たってきた教会・クリスチャンと被災地域の人々との間に、新たな相互関係が築かれてきた一方、人々を教会に招き言葉によって福音を伝える、といった従来の宣教イメージからのパラダイムシフトを迫られてもいます。このような節目に、被災地支援の現場から経験や提言の声に耳を傾け、改めてこの日本で福音を伝えることの意味をご一緒に考えたいと思います。

【日時】2015年2月21日(土)午後1時30分～4時

【場所】お茶の水クリスチャン・センター8Fチャペル

【パネリスト】佐々木真輝氏：北上聖書バプテスト教会牧師、

3.11いわて教会ネットワーク事務局長

米内宏明氏：国分寺バプテスト教会牧師、NPO法人Sola代表

主催：災害救援キリスト者連絡会(DRCnet)

後援：3.11いわて教会ネットワーク、NPO法人Sola、いのちのこば社、
日本福音同盟(JEA)宣教委員会・援助協力委員会、
第6回日本伝道会議実行委員会、日本ローザンヌ委員会

震災後の日本における宗教的ミニストリーの理論と実践

第1回シンポジウム 21世紀に甦る賀川豊彦・ハル

【日時】2015年3月14日(土)13:30-17:00

【場所】明治学院大学白金校舎3号館3203教室 (東京都港区白金台1-2-37)

【基調講演】「あらゆるものを全体から見る姿勢 - 『科学的な神秘主義者と芸術家』である賀川豊彦(1888-1960年)」

トマス・ヘイスティングス氏(日本国際基督教大学財団主任研究員、
賀川豊彦記念松沢資料館 研究員)

【パネルディスカッション】

「賀川の『民主的で平和な日本社会』のヴィジョン」

金井新二氏(賀川豊彦記念松沢資料館 館長、東京大学名誉教授)

「労働組合、協同組合、NPOの連携」

篠田 徹氏(早稲田大学社会科学総合学術院教授)

「豊彦とハルのパートナーシップ」

岩田三枝子氏(東京基督教大学専任講師)

コーディネーター：稲垣久和(東京基督教大学大学院教授)

共催：東京基督教大学 共立基督教研究所、明治学院大学キリスト教研究所 賀川豊彦研究プロジェクト

協賛：賀川豊彦記念松沢資料館、キリスト新聞社

他宗教に関する新聞記事から 【2014年4月～12月】

◇ 社会が個人化しても、宗教に頼る企業

＜“社縁”を深める宗教の役割＞に関しての「深層ワイド」。記事は具体的様相について次の5つをあげる。①商品供養塔。企業活動に関する動植物や道具の供養。都内寺院での庭職組合による草木供養塔と供養祭、センターッキーフライドチキンによる神社での「チキン感謝祭」など。②企業内神社。大阪市の土佐稲荷神社と三菱グループ。東京の三国神社と三井グループ。ただし両神社とも現在は独立した宗教法人。③社員供養塔。高野山の公園墓地を取りあげているが、バブル期は年間10基ほどの建立があったが、現在は2～3基。④お別れの会。社葬のこと。近年は＜先祖祭祀のような宗教的要素を排除＞した例が増加している。⑤＜揃って参拝＞。企業参拝は20年ほど前から増え始め、行っているのは時代の先端を行く企業が多い。東京の神田神社では1月に約1万社およそ10万人が商売繁盛を祈願した。石井研士国学院大学教授は「(企業は)社員の精神修養の一つとして神社を祀り、参拝する」。また村上興匡大正大学教授は「(企業参拝は)社会全体が個人化しても廃れにくい」とし、＜企業が宗教に頼る関係の強固さを指摘する＞。

(中外日報4月30日付)

◇ 30年間、寺檀関係に変化なし。曹洞宗調査

曹洞宗は檀信徒1万人に対して葬儀や信仰などについて2012年6月に質問紙による意識調査を行い、6,530票を回収。その結果をまとめた報告書が3月31日に刊行された。それによると「先祖供養が寺院の要か」との問いに対し53.9%が肯定的だったが、坐禅や教理に親しみを感じるのは1～3割程度だった。「葬式は要らない」との考え方には65.8%が反対であり、＜葬儀の必要性が鮮明になった＞。葬儀自体では、葬儀社と宗教者の対応に＜満足＞を示すものの、費用については「不満」が「どちらともいえない」と合わせると57.6%だった。碑文谷創『SOGI』編集長は「檀家を対象とした調査なのに、葬儀を必要としたのが65%というのは低過ぎるのではな

いか」「檀信徒の生と死をしっかりと見つめる必要がある」と指摘する。なお曹洞宗では檀信徒を対象とした意識調査を1984年と93年の2回行っており、従来と比較し「約30年を経過しても、曹洞宗の寺檀関係には、ほとんど変化がなかった」としている。

(中外日報4月25日付)

◇ 2,585件の愚痴を収集・分析

浄土真宗本願寺派のウェブサイト「他力本願ネット」は、2012年11月～2014年4月15日にかけて京都駅前などで83回にわたり人々の愚痴を聞き、1,021人から2,585件の愚痴を収集し分析した。10代と20代が全体の7割を占め、愚痴も8割を占めた。10代は男女とも4割が「学校」の愚痴、20代は男女とも3割前後が「仕事」だった。なお同ネットはこの活動を愚痴を集める、つまり「グチコレクション(略称グチコレ)」と称し、「愚痴を抱える己の在り方を見つめ、愚痴を言い合うことで、お互いを認め合える心豊かな社会を目指す」活動と位置付けている。

(仏教タイムス4月22日付)

◇ 「日本仏教批判」のシンポジウム

国際日本文化研究センターは、6月14日にシンポジウム「日本仏教批判」を同センターで開催した。松本史朗駒沢大学教授は京都学派の仏教理解について批判し、西田幾多郎も西谷啓二も＜梵我一如のヒンズー教的な考え＞だとし、密教についても同様と司会の末木文美士同センター教授の問いに応じた。ブライアン・ヴィクトリア・オックスフォード大学附属仏教研究所研究員は日本仏教が国家仏教として展開した歴史をとらえて「御用仏教」とし、自己を犠牲にして国という集団エゴを生かすのは「菩薩行から見ればとんでもない話」と批判した。コメンテーターの佐々木閑花園大学教授は「仏教か否かという学問的な筋を通すことと、今の日本の仏教がいかにか今の日本人に役に立って、人を救っていくかはまた別の話」と述べた。

(仏教タイムス6月19日付)

◇ 葬送ジャーナリストの伝統仏教界への批判的提言

葬送ジャーナリスト碑文谷創氏による伝統仏教界への批判的提言。①「葬儀で見る奇妙な

こと」(7月2日付)では僧侶の増上慢ぶりを指摘。②「大きくなる寺院格差」(16日付)では「財政的に豊かな大寺院の僧侶の自覚のなさ、悪さが仏教寺院全体の評判を落としている」。教団の規律の問題である。また<5月から始まったインターネット大手のヤフーの葬儀では「僧侶手配」が15万円になっている。もはや戒名料、読経料とも言わない。「僧侶を手配するのはあたりまえのビジネスとしてのサービス」で、「宗教」や「信仰」が介在する「布施」ではもはやない>。③「戒名(法名)料の問題点」は、今や「布施への言い換えでは済まない」(30日付)。④「檀家制度の見直し」(8月20日付)では「檀信徒の能力を活用しないで、単なる財布としての機能しか期待しないのであれば、寺の社会的能力は弱まるばかりではないか」。

(中外日報)

◇ 新宗教の現在の動向レポート

新宗教の現在の動向を伝える連続レポート。10教団の活動が各テーマごとに3~4教団ずつ報告されている。一部を紹介する。

- ① 対外活動。立正佼成会の「アフリカに毛布を送る」運動のボランティア活動、妙智會教団N G O「ありがとうインターナショナル」の子どものための世界的ネットワーク(7月9日付)。
 - ② 青年の動向。青年の活動が教団内で際立って映るのは<日本そして各教団が高齢化していることの裏返し>(11日付)。
 - ③ 信仰の継承。天理教の「こどもおぢばがえり」は60年間続いており継承者育成につながっている。一方、研究者のコメントは「(若い人は)信仰に関しても親から継承するという発想はない」(16日付)。
 - ④ 布教方法。研究者によると、若者は間接的アプローチを好み、宗教に肯定的イメージを持つ人は漫画やアニメの影響によるという(18日付)。
 - ⑤ 海外活動。海外会員数は霊友会約289万人、創価学会約176万人、生長の家約103万人。真如苑は1999年からハワイで戦没者追悼の祝日「メモリアルデー」に灯籠流しを行っており、今年は一般市民や観光客約5万人が集まった(25日付)。
 - ⑥ 教団トップの諸相(8月1日付)。
 - ⑦ 大建築の施設(20日付)。
 - ⑧ 支部長などの資格(22日付)。
 - ⑨ 宗教連携(27日付)。
 - ⑩ 公益活動(29日付)。
- 最終回に井上順孝国学院大學教授は次のように語る。「従来の宗教は、地縁、血縁、

同士縁の上に成り立っていたが、それがなくなったのが今の時代。情報化時代を迎え、伝統宗教も新宗教も、同じスタートラインに立った」「(だが)宗教も、表層的な変化を見せる一時的ブームはあっても、本質的なところは同じ。良い教えを共有できる教団が人々の信仰を集めていくことは、いつの時代も変わらない」。(中外日報)

◇ 伊勢神宮に関する10年ぶりの意識調査

神社本庁総合研究所が4月に実施した第2回「伊勢神宮」に関する意識調査(1回目は2004年)の結果が、8月28日に神社本庁で行われた神道教学研究大会で報告された。一部を紹介する。①30代女性の複数回参拝、家族・友人との旅行での参拝の増加。②今後の参拝意向の増加。情報が広く届けられ、宗教的関心が低いとされる高学歴者の参拝意向が著しく増加。一方、③国家・皇室との関わりについての意識はあまり共有されていない。④情報源は圧倒的にテレビ、ラジオであり、神職・神社からの情報はごくわずか、など。

(神社新報9月8日付)



各新聞記事から
【2014年10月～12月】

カトリック新聞、キリスト新聞、
クリスチャン新聞、聖公会新聞

10月

◇ カトリック青年によるインターネットラジオ「カトラジ！」開局 毎週土曜放送

「カトラジ！」は、カトリックの信仰をもつ青年による、青年のためのインターネットラジオ番組。カトリック教会の青年たちが自らの手で福音を発信したいとの願いから、インターネット上のラジオ局が立ち上げられた。放送は9月20日スタートし、毎週土曜日、インターネット上の動画配信サービス「ユーチューブチャンネル」を通して聴くことができる。世界とつながるカトリック教会のネットワークを生かしたグローバルな広がりにも期待ができそうだ。（キ4日付）

◇ 関東大震災時の虐殺事件から91年 事件の実態を調査した西崎雅夫氏が報告

「90年前、早稲田奉仕園スコットホールで、何があったの?!」と題して、「関東大震災時・朝鮮人、中国人虐殺・追悼弾圧90周年記念集会」が9月13日、早稲田奉仕園スコットホール（東京都新宿区）で開催された。170人が出席した。

1923年9月、関東大震災時に多くの朝鮮人、中国人が虐殺された。その追悼の集会が、1年後の24年9月13日に同ホールで開催されたが、警察隊100人が押し寄せ、中止命令が出されて集会は解散させられた。この歴史を直視し、謝罪と反省から未来への指針を学び取る機会にしようと、90年後の同日にこの集会が企画された。第一部では、「東京で起きた朝鮮人虐殺事件——目撃証言を中心に」と題して、西崎雅夫氏（一般社団法人ほうせんか理事）が講演した。（キ4日付）

◇ 「いつまで騙される側に」NCC靖国問題委、藤野豊氏呼び講演

「天皇制と差別——いつまで騙される側にいるのか」と題した講演会が、9月8日、日基教団信濃町教会（東京都新宿区）で行われた。日本のハンセン病患者の隔離の歴史を研究している藤野豊氏（敬和学園大学教授）が講演した。日本キリスト教協議会（NCC）靖国神社問題委員会（坂内宗男委員長）が主催し、100人が出席した。（キ4日付）

◇ 教会フリマで「異文化」交流 いのフェス2014 追悼・市川森一さん「帰ってきたウルトラマン」「悪魔と天使の間に」をひもとく

教会関係者によるフリーマーケットとして2011年から毎年行われている「いのり☆フェスティバル」（略称=いのフェス）が今年も9月23日、早稲田奉仕園（新宿区西早稲田）で行われた（同実行委員会主催）。これまでも評論家の岡田斗司夫さん、社会学者の宮台真司さんなど教会外のゲストを招いてきた「いのフェス」だが、「拓け!!未踏の新境地（パラダイス）」と謳う今回は、かつて「ミニストーリー」誌で故・市川森一さん（脚本家）と対談した評論家の切通理作さんや、晩年同じ教会員として親交のあった演出家の真船禎さん（日基教団麻布南部坂教会員）、早稲田大学特撮サークル「怪獣同盟」の学生らを招いたトークライブなどが行われ、異色な顔合わせによるこれまでにない盛り上がりを見せた。（キ4日付）

◇ DVに苦しんできた夫婦がいっしょに受洗 —“古い自分”と決別し新たな一歩

ドメスティックバイオレンス（DV）の加害者、被害者夫婦が9月21日、阿見高洋牧師（福音の群・プレイズ・コミュニティ・チャーチ）の司式により、宮城県の七ヶ浜でそろって洗礼を受けた。「更生は不可能」と一般的に言われているDV加害者だが、阿見牧師夫妻や教会員の祈りとサポート、DV加害者更生プログラムを行うNPO法人「女性・人権支援センター ステップ」理事長の栗原加代美さん（JECA かもい聖書教会員）らの尽力により更生し、夫婦関係も回復。信仰をもった2人は、洗礼を機に新たな一歩を踏み出した。（ク5日付）

◇ **生きている教会は、生きている群れを生み出す！ノエル・パントーハ氏 フィリピンでの全国教会開拓運動の成果を語る**

1975年にフィリピンのプロテスタントの教会は約5千教会だった。しかしドーンミニストリー (DAWN 2000 MOVEMENT -Discipline A Whole Nation)の働きかけもあり、フィリピンの教会は教派を超えて、81の福音派、ペンテコステも含む指導者が集まりその現実を受け止め、何とかすべてのバランガイ4万2千地域(市よりも小さな集落の単位一町々村々)に主の教会を満たそうと「主の2000年」までに5万の教会を目標に教会開拓に取り組んだ。結果、すべての市町村に教会は開拓できなかったものの、5万1千教会が生み出される主の御業を体験した。(ク5日付)

◇ **前田大司教着座 大阪教区 2500人超が喜び共に**

◇ **全ベース会議／仙台教区サポート会議 “子どもの心”“孤立”等の見守り強化へ 東日本大震災被災地支援**

◇ **広島支援、若手が活躍 東北の経験生きた1カ月 祇園ベース**

◇ **司祭のための平和学習開催 那覇教区**
(カ5日付)

◇ **日本人による礼拝会衆賛美歌を「賛美歌工房」が初の歌集を発行**

日本の教会の「新しい礼拝会衆賛美歌」の創作を目指す超教派グループ「賛美歌創作の集い」が、初の歌集「賛美歌工房歌集Ⅰ」を9月10日に発行した。(キ11日付)

◇ **JEA 宣教フォーラム:「結び目」を強めよう
—「危機の時代」に生かす教会・地域ネットワーク**

東日本大震災後の救援活動で力を発揮した、教会間、地域間などの多様なネットワークに注目が集まる。日本福音同盟(JEA)宣教委員会は、「危機の時代を共に生きる～教会ネットワークから学ぶこと～」をテーマに9月29日、東京・千代田区のお茶の水クリスチャン・センターで「『JEA 宣教フォーラム』2014」(第6回日本伝道会議、DRC ネットと共催)を開催した。(ク12日付)

◇ **影響力を神のために用いよう一次世代励ます“GLS NEXT”セミナー**

世界100か国以上の国において開催される「グローバル・リーダーシップ・サミット」(GLS)は、毎年、世界的な諸問題に取り組むクリスチャン・リーダーの講演から学ぶ集会だ。GLSの次世代向け集会「GLS NEXT」が2012年から開かれているが、今年は9月15日、神奈川県横浜市西区の横浜市教育会館で開かれた。

GLSの次世代向け集会は日本発のアイデアだ。今では米国、韓国でも実施されている。

(ク12日付)

◇ **シンポジウム「福音と差別」人が大切にされる社会を**

◇ **特別臨時司教総会 右近列福求め 教皇に書簡**

◇ **日本カトリック正義と平和協議会 脱核部会が発足 司教団提言の具体化目指すネットワーク**
(カ12日付)

◇ **日基督教団が48年ぶり開催 青年大会に370人参加**

日基督教団「教会中高生・青年大会2014」が8月19～21日、国際青少年研修センター東山荘(静岡県御殿場市)で開催された。教団主催の青年大会の開催は48年ぶり。「イエス・キリストの名によって立ち上がり歩きなさい」を主題に、実行委員などのスタッフや中高生の引率者も含めて370人が参加した。(キ18日付)

◇ **日本基督教学会が関学で学術大会**

「キリスト教研究の可能性」と題する日本基督教学会第62回学術大会が9月9～10日、関西学院大学(兵庫県西宮市)で開催された。全国各地より研究者ら約180人が集い、研究発表と年次総会を行った。

水垣渉氏(京都大学名誉教授)は「聖書的伝統としてのキリスト教」と題し、キリスト教とは何か、という問いをめぐるキリスト教学の学問的地平について、出発点としての多様性、多様性から全体性へ、聖書的伝統という三点から、人類にとって最も巨大な伝統である聖書的伝統を開くキリスト教研究の可能性について講演した。(キ18日付)

◇ キリスト教独立伝道会「平和講演会」

キリストにある絶対的平和主義に立ち、十字架の福音を伝道することを目的とするキリスト教独立伝道会（田口宗一会長）が9月23日、在日本韓国 YMCA アジア青少年センター（東京都千代田区）で「キリスト教平和講演会」を開催した。今野利介（基督教独立学園理事）、鷹巣直美（「憲法9条にノーベル平和賞を」実行委員）の両氏が講演した。（キ18日付）

◇ 仕事・ビジネス/人間性回復とアイデアで社会変革 7media Young Professionals フォーラム

キリスト教精神を基盤に、アート、ビジネス、救援、リーダーシップなど、社会の7つの領域に包括的に取り組む7media（アンディ・ゲーム代表）はビジネス、マーケットプレイスの部門の Young Professionals において、フォーラムを昨年からは開催している。今年も9月23日に港区の汐留ビルディングの会議室で開いた。ゲストに、シンガポールからデシリオングループ CEO のトーマス・リー氏、アウェイクングループ CEO のカン・ソヤン氏、アメリカからセカイ・クリエイター代表のステイブ・サカニシ氏らを招いた。「人間として働く」に焦点をあて、働き方や、起業家精神、社会企業の視点による社会問題解決への励ましについて、それぞれが発題した。（ク19日付）

◇ 生活/KGK全国卒業生会全国集会「一生ものの財産」14年ぶりに開催

1947年に創立し、全国にネットワークをもつ学生伝道団体、キリスト者学生会（KGK）の卒業生会全国集会（GNC）が、14年ぶりに開催された。9月21日～23日の予定で渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた。テーマは「一生ものの財産～交わり・祈り・みことば～」。初日は、講師は安藤理恵子元総主事（玉川聖学院院長）がメッセージ、地区紹介などがあつた。（ク19日付）

◇ 教皇フランシスコ「初聖体」思い起こし 教会一致への願い強調

◇ 率直・謙虚に討議を 家庭についてのシノプスで教皇

◇ 韓国セウォル号事故のカルト教団が日本にも東京で緊急対策セミナー

◇ 放射線から何を守る 人か？村か？区長が語る現状 神奈川・藤沢教会で講演会

（カ19日付）

◇ クリスマス見本市&ブックフェアに約40社 一般公開し展示即売会も

日本キリスト教書販売株式会社（日キ販）は10月7日、大田産業プラザ（東京都大田区）で、クリスマス用品やカレンダー、本などを特別展示する「クリスマス見本市&キリスト教ブックフェア」を開催した。

この見本市は、キリスト教の専門出版社、絵本出版社、用品メーカーなどが一堂に会し、専門書店を対象に新商品のプレゼンなどを行うもの。これまで、キリスト教出版販売協会に加盟する企業を中心に、業界関係者を対象とした催しだったが、今回は初の試みとして広く一般にも参加を呼びかけ、後半は一般開放し、その場で購入することもできる即売会も併催された。

全国から約40社が出展し、200人以上の来場者が、各ブースの展示をまわりながら担当者の説明に耳を傾けていた。（キ25日付）

◇ 無教会全国集会2014開催

無教会全国集会が10月4日、5日の両日、山崎製パン企業年金会館サンシティ（市川市）を会場に開催。全国から130人が参加し、主題「主に生かされて—共に生きるために」のもとに講演、発題、分科会、青年国際交流討論会、聖書講和会などのプログラムが行われた。（キ25日付）

◇ 憲法9条 世界が目撃したがノーベル平和賞落選—受賞するまで運動を世界に広げたい

ノーベル平和賞の発表が10月10日にあり、「憲法9条を保持する日本国民」の受賞はならなかった。しかし、発表当日までに44万筆を超える署名が集まり、発表直前の平和賞受賞予測でトップに浮上するなど、「憲法9条にノーベル平和賞」は、国内外から注目を集めた。クリスチャンで2児の母親の鷹巣直美さん（バプ教会連合・大野キリスト教会員）の発案で始まったこの運動は、「戦争は絶対してはいけない」という平和への願いを、着実に多くの人々に届けている。（ク26日付）

◇ 青年/キャンプってすごい！ NSD セミナー

「クリスチャンキャンプってすごい」をテーマに NSD（日本青年伝道会議）セミナー（日本福音同盟青年委員会主催）が、9月29日に東京・千代田区のお茶の水クリスチャン・センターで開かれた。講師は中村克哉さん（hi-b.a. スタッフ）。多様な教派教団からの参加者らと、次世代宣教における、キャンプの魅力を数え上げて確認し、具体的にキャンプを作り上げる工夫や見方について、話し合った。NSD セミナーは、2012年に開催された日本青年伝道会議（NSD）のテーマや、つながりを継承する。（ク26日付）

◇ 教皇フランシスコ パウロ6世を列福「偉大なかじ取り役」

◇ 教皇フランシスコ 教会は世界に希望の光を

◇ 臨時シノダスのメッセージ 伝統的家庭を励ます内容

◇ シノダス 最終報告を採択 問題の案件は議論を持ち越す

◇ 禁教下の日本に潜入 シドゥティ没後300年巡礼、講演、ミサで記念 東京の史跡や教会会場に（カ26日付）

11月

◇ 「教会と地域福祉」シンポ 坪井節子氏 “ひとりじゃない、福音を”変容する家族、児童福祉テーマに

教会が地域に開かれ、仕えるためには何が求められているのか。その答えを模索する「教会と地域福祉」フォーラム21の第2回シンポジウムが9月27日、日基教団富士見町教会（東京都千代田区）で開かれた。高齢者福祉を扱った前回に続き、今回は「変容する家族と教会の役割——弱さと痛みに寄り添うために」をテーマに、児童福祉に携わる施設関係者や学生、牧師、信徒ら約130人が集まった（キリスト新聞社、東京基督教大学共立基督教研究所共催）。（キ1日付）

◇ 両親と自分の幸福は表裏一体 埼玉YMCA チャリティ講演に杉澤卓巳氏

「高齢化時代の幸福とは」と題して、杉澤卓巳氏（グループホーム福音の園・川越ホーム

長）が10月3日、埼玉YMCA創立40周年記念チャリティ講演会で講演した。会場はふじみ野市立産業文化センター。杉澤氏は、日本ホーリネス教団・東京聖書学院を卒業後、牧師を経て2004年に「グループホーム福音の園・川越」を開所した。現在、認知症を患った高齢者を支援する「グループホーム」介護サービス事業と、日中通いの高齢者を支援する「デイサービス」介護事業を行っている。同氏は、「365日、毎日が敬老の日」であるべきだと主張。高齢者が粗末にされ、ないがしろにされている現実や、こじれた親子関係・家族関係に直面することがあるとし、その原因について「『キリスト教会の社会的責任である』と痛感するようになった」と語った。（キ1日付）

◇ 患者の気持ちに常に寄り添う 柴田実氏が「スピリチュアルケア」語る

聖路加国際病院のチャプレンを務める柴田実氏が「スピリチュアルケア—人間の生と死の現場で魂を支える」と題して10月11日、慶應義塾大学信濃町キャンパス（東京都新宿区）で講演した。NPO 法人臨床パストラル教育研究センター（ウエルデマール・キップス理事長）の関東甲信越ブロックが主催し、約60人が参加した。（キ1日付）

◇ 東京・OCC に「ビリー・グラハム フォトギャラリー」オープン—来年11月日本武道館でのセレブレーション オブ ラブへ宣教の拠点に

ビリー・グラハム伝道協会(BGEA)=フランクリン・グラハム総裁=の65年に及ぶ宣教の働きと、そこに現された神様のみ業を写真と映像で見ることが出来る「ビリー・グラハムフォトギャラリー」が、10月7日、お茶の水クリスチャン・センター(OCC)にオープン、教会の牧師ら関係者を招いて開所式が行われた。この日の夜には、来年11月に日本武道館で行われる「セレブレーションオブラブ with フランクリン・グラハム」(ミッション2015実行委員会主催)の1年前大会「スペシャル Talk & コンサート」が行われ、それに合わせたタイムリーなオープニングとなった。1年後の大会に向けて、またさらにその後のフォローアップをも見据えて、都内に生まれた新たな福音宣教の拠点に、参列者

からは口々に大きな期待の声が寄せられた。
(ク2日付)

◇ 広島土砂災害支援クリスチャン集会 目を覚まして一致するとき

8月20日に広島県安佐南区、安佐北区を中心に起きた大雨土砂崩れは、甚大な被害を与えた。7万世帯16万人に避難勧告が出され、死者74人、全壊半壊の住居は300軒、浸水は4000軒に及んだ。キリスト教会も支援活動に尽力してきた。そのような中、「祈ろう ひろしま！広島土砂災害支援 Pray, Hiroshima! 祈り、仕え、愛する者へ…」が10月17日、広島市安佐南区の安佐南区文化センターで始まり、土砂災害と支援活動の経過を報告し、引き続き祈りと支援を募った。初日は弟子訓練の働きで国際的に知られる、シンガポール・カペナント教会のエドモンド・チャン牧師が講演。Ⅱコリント1章3～11節から「苦しみに打ち勝つ」と題して聖書が示す苦難の中での生き方を語った。2日目は同師がヨエル書3章9～14節から「時は来た」と題してクリスチャンが目を覚まして、一致すべき時が来ていると勧めた。(ク2日付)

◇ 教皇フランシスコ 死刑と終身刑の廃止訴える「刑罰の大衆迎合主義」を非難

◇ 5学校法人 合併へ協議「イエズス会教育の深化」など目指す (カ2日付)

◇ 第31回ヨーロッパ・キリスト者の集い「寄留の民」への宣教に使命

ベルギーの首都ブリュッセルから北へ約100キロ。緑豊かな田園風景が広がる郊外の街に、200人を超えるキリスト者がヨーロッパ中から集まると聞き、韓国の日本宣教教会(曹紗玉牧師)の支援でその輪に加えていただいた。

毎年夏に、ヨーロッパ在住の邦人クリスチャンが教派を超えて一堂に会する「ヨーロッパ・キリスト者の集い」は、聖書を中心とした学びと交わりによる宣教協力を目的としたもの。31回目を迎えた今年は、ブリュッセル日本語プロテスタント教会の主催で7月31日～8月3日に開かれた。(キ8日付)

◇ 功労者に松居直氏、徳善義和氏 日本キリスト教文化協会が顕彰式

公益財団法人日本キリスト教文化協会(近藤勝彦代表理事)は10月20日、2014年の「キリスト教功労者」に松居直(福音館相談役)、徳善義和(ルーテル学院大学名誉教授)の両氏を選定し、東京・銀座の教文館ウェンライト・ホールで顕彰式を行った。今年で45回目を迎えた同賞は、1964年から音楽、美術、文学、教育、医療、福祉、神学などあらゆる分野で功績のあった人を顕彰するもの。これまでも日野原重明氏、武田清子氏、渡辺信夫氏ら174人が顕彰されている。顕彰理由としては、「日本の児童文学を発展させ、世界に広める役割を果たした」(松居氏)、「日本におけるルター研究の発展に尽力した」(徳善氏)ことが挙げられた。(キ8日付)

◇ CS 再生に光明 教会学校スターターキット

全国的に厳しい状況にある教会学校(CS)。CS 成長センターが主催した教師セミナーや全国の教会を対象に行った「教会学校の実情アンケート」(12年)によれば、今の日本の教会のCSの半数以上が在籍生徒10人以下、生徒1人につきCS教師0.5～1人、地域の子どもが教会に来ないなどの課題が浮き彫りにされた。この現状を何とか打開できないかと、CS 成長センターとCS 活性化推進委員会メンバーが検討する中で生まれたのが、CS・子ども会に必要なものをすべてそろえてパッケージにした「教会学校スターターキット」だ。10月25日、お茶の水クリスチャン・センターで開かれた「CS 成長センター 秋の特別セミナー」(同主催)の中で、来年1月に発売される「スターターキット」についての説明があり、CS 再生に向けたツールとして期待が高まっている。(ク9日付)

◇ 天安門事件指名手配の張牧師講演 在日華人伝道会

「2014年日本華人伝道大会」(日本華人クリスチャンセンター〔JCC〕主催)が10月17～19日、東京・新宿区大久保の東京中央教会で開催。講師は米ノースバージニア州とシンガポールにある豊収教会創設牧師で中国系アメリカ人の張

伯笠氏。張氏は「生命の危機を乗り越えて」をテーマにメッセージした。

(ク9日付)

◇「賀川豊彦と吉野作造」シンポ 民主主義、貧困問題 全人的キリスト教

大正デモクラシーを理論的に指導したと言われる、政治学者でキリスト者の吉野作造を研究、企画展示する吉野作造記念館（宮城県大崎市古川福沼1-2-3）は、今年、「吉野作造とキリスト教」をテーマに展示活動をしている。後期は「吉野作造と賀川豊彦―貧しき、弱き者のために―」と題した企画展を実施している。オープニングシンポジウムが、10月12日に開かれ、パネリストに金井新二氏（賀川豊彦記念松沢資料館館長）、大川真氏（吉野作造記念館館長）、コーディネーターに森田明彦氏（尚綱学院大学教授）が立った。民主主義から日本のキリスト教のあり方、貧困救済、人権の問題について議論した。（ク9日付）

◇世界のイスラム指導者「イスラム国」を非難 ◇全国教区広報担当者会議 教区報制作 実践的に学ぶ

◇教皇フランシスコ ビッグバンや進化論 神の存在と矛盾しない

◇「貧困との闘いを」教皇 草の根活動家らに促す

◇袴田さんも登壇 死刑廃止で国際シンポ 聖エジディオ共同体・日本など東京で

(カ9日付)

◇イスラエル発掘調査50周年インタビュー

日本の考古学調査団がイスラエルのテル・ゼロール遺跡において本格的な発掘調査を開始してから50年。この間、三つの遺跡で調査が実施され、その研究成果は国際的に高い評価を受けてきた。大学院生のころから発掘調査に加わり、聖書考古学の発展に尽力してきた月本昭男さん（聖書学者、立教大学名誉教授）に話を聞いた。（キ15日付）

◇宗教者が「死刑」と「いのち」考察 国際シンポ「いのちなきところ正義なし」

「死刑といのちを考える」をテーマに、共に死刑を考える国際シンポジウム「いのちなきところ正義なし2014」が10月25日、在日本

韓国 YMCA アジア青少年センター（東京都千代田区）で開催された。カトリック信徒団体・国際 NGO 聖エジディオ共同体と、欧州委員会が主催し、約150人が参加した。パネル・ディスカッション「いのちを考える」では、真宗大谷派、天台宗、カトリック教会、日本バプテスト連盟、大本の各宗教者が死刑をどのように捉えているのかを話し合った。（キ15日付）

◇孤児たちが健全に育つ社会を「世界孤児の日」制定目指すフォーラム

来年の国連設立70周年総会で「世界孤児の日」が制定されることを願って、「代替養育が必要な児童のための世界孤児の日制定推進ハイレベルフォーラム」が10月27日、日本財団会議室（東京都港区）で開催された。「韓国孤児の母」と言われる田内千鶴子（1912～1968年）の長男で、国連世界孤児の日制定推進提唱者の田内基氏（社会福祉法人「こころの家族」理事長）があいさつし、英国上院議員のデイビッド・アルトン氏が基調講演を行った。また、スリランカ、日本、韓国、マラウイ、米国の専門家が発表を行った。日本からは阿部志郎氏（神奈川県立保健福祉大学名誉学長）が、「日本の子ども一特に震災で被災した一〇の状況と課題」と題して発題。「子どもは愛されなければならない。愛されるべき存在だ。愛された子どもは愛する人になる」と述べ、親に愛されない子どもが愛する人になるのは難しいと語った。（キ15日付）

◇三浦光世さん逝去―作家の綾子さんをおかけで支え続け

『氷点』『塩狩峠』『道ありき』など、数々のキリスト教作品を生み出したクリスチャン作家・三浦綾子さんをおかけで支えて来た、夫の三浦光世さんが10月30日、敗血症のため亡くなった。90歳だった。光世さんは、綾子さんの口述筆記でその執筆を助け、病弱だった晩年の綾子さんを献身的に介護した。その二人三脚の歩みと信仰は、多くの人々に感銘を与えて来た。（ク16日付）

◇ 女性牧師、教職をどう見る？ 改革派の条項変更を受けて

女性教師、長老任職について長らく審議をしていた、日本キリスト改革派教会は10月14～16日に開かれた第69回定期大会（小峯明議長）において、治会長老、教師任職の規定について「男子」という規定を「者」に変更し、女性教師、長老任職への道を開いた。近年世界的にも女性教職の道を開いている動きがあるが、日本の各教団・教派ではどのような立場、動きがあるだろうか。女性牧師・長老を認めない立場の日本キリスト改革長老教会、日本長老教会、近年女性牧師・司祭を認めた日本バプテスト教会連合、日本聖公会、女性按手について検討しようとしている日本福音自由教会協議会に聞いた。（ク16日付）

◇ 教皇フランシスコ 司教は奉仕者で牧者 立身出世を求めない

◇ 婚姻無効の手続き 教皇フランシスコ 迅速化、無料化 促す

◇ 右近、来年列福承認か 列聖省長官、公式巡礼団に語る

◇ 反差別訴えデモ ヘイト・スピーチ停止要求 東京・新宿

◇ 福島の課題聞く 宗教者ら公開学習会 WCRP日本委員会 （カ16日付）

◇ 日基教団玉川平安教会 “総会の開催と役員改選を、信徒67人が牧師を提訴

2年前の本紙（2012年6月16日付）で報じた日基教団玉川平安教会の牧師と信徒間での裁判。あれから2年を経過した今も双方の主張が折り合うことはなく、「和解」「収束」とは言い難い事態に発展している。先の裁判で被告となった信徒を含む67人が原告となり、今度は2人の牧師を訴えたのだ。前回の裁判は、同教会牧師である藤田義哉と山口隆康の両氏が、「藤田牧師のセクシャルハラスメントについて」（2008年11月）、「玉川平安教会の現状と山口隆康牧師について」（09年8月）と題する文書を頒布した信徒に対し、「人格を蹂躪するかのごとき不穏当な表現を用いて批判する行為」だとして、10年に文書の頒布、告知の差し止めを求めて訴えたもの。東京地裁は、被告側が同旨の文書について「頒布又は内容の告知をしない」こと、原

告が「その余の請求を放棄する」ことなどを含む和解案を提示し、12年5月24日、和解案を双方が受け入れるかたちで収束が図られた。

しかし、その後も教会総会は開催されず、役員改選や予算・決算の承認も行われなかったことを受け、教会規則第11条2項の現住陪餐会員にあたる67人が原告となり、新たな民事裁判を起こすこととなった。第1回公判は12月16日。

（キ22日付）

◇ 書店で「ざっくり」神学講座 多彩な講師で連続3回 地方でも

雑誌「ミニストリー」（キリスト新聞社）の編集委員らが講師となって、実践神学にまつわる45分の授業を展開する連続セミナー「ざっくりわかる出張『ミニストリー』神学講座」が、11月10日からスタートした。CLC ブックスお茶の水店の一角に設けられたセミナー会場は、豪華な講師陣から直に学ぼうと集まった牧師や信徒らで満席となった。初回は同誌編集委員の西原廉太氏（立教大学副総長）が、「現場と神学—日本の民衆とキリスト教の邂逅」と題して講義。内村鑑三や植村正久など日本キリスト教史に名を残す人物たちの陰で、聖書を愛読し、キリスト教と向き合った人物として足尾鉍毒事件に取り組んだ田中正造、聖公会の信徒でもありアイヌ伝統文化の復権に寄与した知里幸恵のほか、「荊冠旗」をシンボルとする水平社を取り上げた。その上で、聖書が単に2千年前に書かれただけの書物ではなく、民衆の文字通りの「生きる糧」となった存在であり、彼らこそが読み取れた福音の意味があったのではないかと提起した。（キ22日付）

◇ 悔い改めのない「成功」ミニストリーに警鐘—第4回「包括的な日本宣教を考える」ローザンヌシンポジウム

性の混乱、権力、成功、物質的な欲望を偶像化する危険の具体的事例が世界中の教会、ミニストリーで報告されている。これに対し、世界的な宣教運動、ローザンヌ運動の日本的展開を進める日本ローザンヌ委員会は、11月8日、「キリストの教会を謙遜と誠実と質素へと呼び戻す」のテーマでシンポジウム「包括的な日本宣教を考える」第4回を、お茶の水クリスチャン・センターで開催。国際ローザンヌ運動総裁

のマイケル・オー氏が基調講演、大学生伝道の現場から田中牧子氏(キリスト者学生会[KGK]主事)、世界の教職者たちとの出会いの経験から渡部信氏(日本聖書協会総主事)が応答した。
(ク23日付)

◇ 第3回「希望を告白する夜」

若者たちが主体的に政治問題を語り合い祈り合う —キリスト者は第3の道を

学生や若者たちが主体的に政治の問題を考え祈る集会「希望を告白する夜」(「キボコク」)第3回(同実行委員会主催)が、11月7日、お茶の水クリスチャン・センターで開かれた。(ク23日付)

◇ 平和の教え 再度確認 日韓の司教 20回 目の交流会

◇ 教皇、世界に訴える 迫害キリスト者の保護 「全ての善意の人々に良心の発動を」

◇ 首都圏5大学と「反貧困」の催し カリタ スジャパン 浜矩子さん招き聖心女子大学で

◇ 秋田に韓国人信徒夫婦の殉教碑建立 (カ23日付)

◇ 一神教は危険か?—西南学院創立100周年 シンポジウム

10月26日、「一神教は危険か?—宗教間対話と共生の可能性—」と題するシンポジウムが東京都内で行われた。2016年に創立100周年を迎える西南学院(G・W・バークレー院長)が、その東京オフィスのあるサピアタワー(千代田区)内のホールで100周年記念事業として行った。

一般的に、一神教は排他的で不寛容であるがゆえに危険であり、多神教は他者を尊重し寛容であるがゆえに平和的である、と語られるものの、それを是とすべきなのか。そもそも一神教とは何か。どんな場合に宗教は危険になるのか。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の研究者の発題を通し、異なる宗教が共生出来る可能性を探った。(ク30日付、キ12月6日付)

◇ 教皇フランシスコ「全ての人に食料を」国際 栄養会議で演説

◇ 教皇 愛と優しさと信仰で聖性を

◇ ロゴス点字図書館高橋館長に本間一夫文化賞 「選挙公報」の点訳など尽力

◇ カトリックを去り福音派や無宗教に 中南米 (カ30日付)

◇ 生命・正義・平和を求めて 日韓聖公会宣教協 働30周年記念大会 濟州島で開催される

10月20日から23日までの4日間、韓国の濟州島で、日韓聖公会宣教協働30周年記念大会が開催された。韓国3教区、日本11教区の主教・司祭・信徒が参加、宣教協働者・女性・青年の代表ら、韓国側36名、日本側51名の参加があった。
(聖25日付)

◇ 人権セミナー開催される 横浜聖アンデレ 会で 基調講演講師に関田寛雄牧師

10月28日から30日までの3日間、横浜聖アンデレ教会で、「キリスト教信仰と人権」をテーマに、人権セミナーが開催された。
(聖25日付)

12月

◇ 「待降節」にちなんだ聖書ゲーム発売 東京ビ ッグサイトのイベントでお披露目

「遊びながら聖書の世界に親しめる」ことをコンセプトとしたゲームシリーズ「聖書コレクション」の第3作目となるカードゲーム『バイブルハンターアドベント』(キリスト新聞社)が11月14日に発売され、16日開催のイベント「ゲームマーケット2014秋」でお披露目された(東京ビッグサイト、江東区有明)。

このゲームは、今年3月に発売された第1作目の『バイブルハンター』と同じく、使徒や預言者たちの力を借りながら「失われた聖書」を集めていくという設定。「カードの種類を増やしてほしい」というユーザーの要望に応え、アドベント(待降節)にちなんだ「イエスの母マリア」「東方の三博士」など、15人の登場人物が新たに追加。「ベツレヘムの星」「黄金」「乳香」「没薬」のほか、「ソドムとゴモラ」や「バベルの塔」といった有名なエピソードもカード化されている。前作と混ぜても遊べ、『アドベント』単体で遊べるのが特徴。

ゲームデザインは前作に引き続き中村誠氏、監修も日本キリスト教会浦和教会牧師の三輪地塩氏が担当し、日本聖書協会の公式な推薦を得た。これらの取り組みは11月4日付の「朝日新

聞」でも「『聖書のゲーム』若者に人気 危機感から門戸開く試み」として取り上げられ、「日本のキリスト教徒は人口の推定1%未満で、若い信者はなかなか増えない。そうした危機感が、今回の企画の背景にはある」と紹介された。(キ6日付)

◇ 青山学院が140周年を記念 式典で“オール青山聖歌隊、が奉唱

青山学院(東京都渋谷区)は創立140周年を記念し11月15日、国内外の来賓、学院関係者、在校生、保護者、教職員などを招いて青山学院講堂で記念式典を行った。約1500人が出席した。式典はシュー土戸ポール学院宗教部長の司式で、礼拝形式で行われた。合同メソジスト教会高等教育局ジェラルド・ロード副総幹事がアメリカより出席、「SALT OF THE EARTH, LIGHT OF THE WORLD(地の塩、世の光)」と題して説教を行った。ロード氏は青山学院のスクールモットーである「地の塩、世の光」をこのような行事の際に確認することは大事、として「塩は少しだけで効果がある。日本のキリスト教人口は2%だが、例え少数派であっても人々の模範として生きるために必要」と語った。

(キ6日付)

◇ 次世代変える子どもに焦点

—「4/14の窓 カンファレンス」日本での初開催

世界中の信仰決心者の71%が4歳から14歳までであるという統計を踏まえ、この年代層に焦点を当てた伝道や教会教育を励ます世界的な運動「4/14の窓」。日本で初めての「4/14の窓カンファレンス」(日本4/14の窓サーバントチーム主催)が11月24、25日、東京大田区矢口の東京ライトハウスチャーチで開催され、のべ523人が参加。オープニングセレブレーション(キッズとともに)、4/14運動を実践する海外講師によるレクチャー、子どもや青年伝道などに携わる講師による34の分科会、キッズと一緒にチャレンジナイト、クロージングワークショップ&セレモニーなどが開かれた。

(ク7日付)

◇ 日本福音主義神学会 全国神学研究会議 「聖書信仰と福音主義の未来」行くべき方向探る

「福音主義」は今後どこへ向かうのか—そんな本質的な問題意識を軸に、日本福音主義神学会(大坂太郎理事長)が2014年度全国神学研究会議を11月4~6日、奈良県生駒市の関西聖書学院で開いた。大きな関心を呼んで約200人が参加。積義と教理について福音主義の基盤を、歴史・実践について福音主義の状況を確認し、3分野の分科会とパネル・ディスカッションで議論を深め、未来へのガイドラインを模索した。(ク7日付)

◇「奉獻生活の年」始まる 長崎、東京で開始のミサ

◇ 欧州議会で教皇「祖母」なる大陸に 活気を取り戻そう

◇ 教皇機内会見 テロ、性虐待で発言「対話の扉閉ざさない」

◇「一つになろう」 ザビエル祭に1500人 日本カトリック神学院(東京)

(カ7日付)

◇ 映画『最後の命』公開記念対談 「罪」と向き合う旅の果てに 松本准平さん(映画監督)×古賀博さん(牧師)

柳楽優弥さんの主演や米チェルシー映画祭での最優秀脚本賞受賞で話題を呼んだ中村文則原作の映画『最後の命』。幼少期に凄惨な婦女暴行事件の現場を目撃した幼い2人が、その忌まわしい記憶に翻弄されながら、それぞれの「性」「罪」と向き合い、儂い「生」をつむいでいく物語。監督は長崎生まれ、カトリック教会で洗礼を受けながら、プロテスタントの教会にも通うという特異な体験を持つ松本准平さん。新進気鋭の監督が見据えるのは絶望か、希望か。映画の公開を機に、牧師として説教者として、数多くの文学に触れてきた古賀博さん(日基教団早稲田教会牧師)との対談が実現した。(キ13日付)

◇ 米キリスト教出版事情に学ぶ 出版販売協会が専門家招き勉強会

キリスト教出版販売協会出版部会(高木誠一部会長)は10月24日、ウォン・ダルチュン氏(元アビンドンプレスディレクター)を招いた勉強会を、東京・銀座の日本聖書協会で開催した。アビンドンプレスはメソジスト教

会によって1789年に設立されたアメリカ最大手のキリスト教出版社。ウォン氏の親族である朴憲郁氏（東京神学大学教授）の仲介で実現に至った。

「米国における宗教関係出版の職務の挑戦と希望」と題して語ったウォン氏は、出版社にとって大きな収益の柱は、比較的安価に製作でき、一定部数の販売が見込める教会学校向けの出版物だが、教会学校の生徒数減少に伴い、かつてのような収益は上げることができないと指摘。

さらに読者層の多様化により、書籍1点当たりの発行部数が限られるようになってきており、出版費用の上昇につながっているという。売上を維持するために発行点数を増やさなければならないものの、牧師が1年に購入する書籍は2冊だけという統計もあり、購買力の低下も深刻だ。他方、アビンドンプレスが2012年に刊行したCEB（Common English Bible）は初年度に75万部を販売。これは福音派を中心に最も広く読まれている英訳聖書NIVと、リベラルなNRSVとの中間に位置づけられる超教派の国際的な聖書翻訳である。このような状況を踏まえ、アビンドンプレスとグループ社は73店舗あった直営書店を昨年すべて閉店し、直接営業に切り替えた。直営書店は全米に70人の担当者がおり、教会や個人に直接営業を行っている。

アビンドンプレスの収益の柱は、原価率20～25%の教科書である。国外で製作すれば費用は抑えられるが、重版に時間がかかるほか、品質管理が難しい。電子書籍が売上に占める比率は20%以下。製作コストはむしろ電子書籍のほうが高いという。

日本と比較すると市場規模ははるかに大きいものの、共通する課題も多い。参加者からは、印税率や編集者1人当たりの年間製作点数など、多くの質問が寄せられた。

（キ13日付）

◇ **日本聖公会 日本福音ルーテル教会 カトリック教会 初の3教会合同礼拝**

◇ **教皇と諸宗教指導者 奴隷制度撲滅目指す 共同宣言に署名「2020年までに」**

◇ **東日本大震災被災地支援全ベース会議 仙台教区サポート会議 岩手・釜石住民の痛みに**

向き合う 数年先視野に体制の模索も

◇ **各政党姿勢示す ヘイト・スピーチ対策 弁護士ら調査**

◇ **岡田大司教、竹下節子さん対談 宣教のヒント 探る 東京教区アレルヤ会**

（カ14付）

◇ **特定秘密保護法施行前日 牧師の会が記者会見**

特定秘密保護法が12月10日、施行された。それに先立ち9日、「特定秘密保護法に反対する牧師の会（以下牧師の会）」（共同代表／朝岡勝、安海和宣）は、お茶の水クリスチャン・センターで記者会見を開き、「施行を前にしての声明」を発表。冒頭で同会発足の経緯を安海氏（東京めぐみ教会牧師）が説明。続いて朝岡氏（同盟基督・徳丸町キリスト教会牧師）と、呼びかけ人の川上直哉（日基教団正教師、東北ヘルプ事務局長）、城倉啓（バプ連盟・泉バプテスト教会牧師）、杉浦紀明（ホーリネス・川越高階キリスト教会牧師）、星出卓也（長老教会・西武柳沢キリスト教会牧師）の各氏が発言した。

声明では、「同法が成立してからの1年間、多くの国民の不安や反対の声、国の内外からの重大な懸念の声が寄せられていたにもかかわらず、政府は主権者たる国民の声に謙虚に耳を傾けることなく、むしろ法施行に向けての準備を着々と進めてきた。私たちの不安の懸念が払拭されるどころか、ますます同法施行後の社会に対する深刻な憂いを抱かざるを得ない」とし、同法の施行に反対し、速やかに廃止されることを求めた。（ク21/28日付）

◇ **被災地支援で生きたパラダイム転換 仙台バプテスト神学校50周年**

新約聖書に立ち戻って伝統的な神学校教育のあり方をパラダイム転換し、教会を主体とした神学教育を実践してきたことが、東日本大震災で東北の諸教会が地域社会に仕えた働きの理念を、根底で支えていた—仙台バプテスト神学校が10月6～8日、創立50周年を記念して「いかに次世代を育成するか」をテーマに開いたシンポジウムで、そんな実態が明らかになった。（ク21/28日付）

* 記念講演は「JMRレポート」参照

◇ 教皇フランシスコ「討論の自由が大切」=シノ
ドス、衝突ではない

◇ 「核兵器廃絶を」 教皇、世界に呼び掛け

◇ 注目の「提題解説(リネアメンタ)」 バチカン
シノドス資料 各国へ

◇ 国際デーに被災地から 物産展や活動紹介
大分教区

◇ 東日本大震災復興支援カレンダー 仙台教区
サポートセンターが作成

(カ21日付)

◇ カトリック・聖公会・福音ルーテル 日本で初の
合同礼拝開催 第二バチカン公会議「エキュメ
ニズム教令」50年記念

第二バチカン公会議で採択された「エキュ
メニズムに関する教令」が1964年に発布され
てから今年で50年。これを記念して、「いつく
しみと愛のあるところ」をテーマに、日本の
カトリック教会、日本聖公会、日本福音ルー
テル教会の3教会による初めての合同礼拝が
11月30日、カトリック東京カテドラル関口教
会で行われた。各教会から教職・信徒など約
630人が参集した。

第一部のシンポジウム「『エキュメニズム教
令』50年の実り」では、江藤直純氏（日本福
音ルーテル教会牧師、ルーテル学院大学学
長）の司会のもと、光延一郎（イエズス会司
祭、上智大学神学部長）、西原廉太（日本聖
公会司祭、立教大学副総長）、石居基夫（日
本福音ルーテル教会牧師、日本ルーテル神学
校校長）の3氏が発題した。

「第二バチカン公会議とローマ・カトリッ
ク教会のエキュメニズム」と題して発題した
光延氏は、第二バチカン公会議の根本動機は、
①教会の一致（エキュメニズム）、②平和
（二度と戦争をしない）、③ローマ・カトリ
ック教会が自らを開き「世界」とかかわるこ
と—の3点であるとし、これに応じて同公会
議で四つの憲章、九つの教令、三つの宣言が
出されたことを紹介。教令の一つである「エ
キュメニズムに関する教令」は、「相手を理解
するより『断罪』しようとする姿勢が先行し
た過去の失敗を反省し、キリストの福音にい
っそう忠実な教会の形成に向かって踏み出す
決意を示し」たものだと解説した。

その上で、エキュメニズムの目標達成に向
かう対話のプロセス例として、①過去の争い
についての悔い改めと過ちの告白、②それぞ
れが受け継いできた信仰理解、すなわち神学
の相違について共同で理解する、③共同的
神学理解における共通点を探す、④キリス
ト教の根本真理から見直して、相互の立場
を吟味する、⑤相違を乗り越えて、一致
に向かう具体的な歩みに共同で踏み出す—
という5点を示した。

最後に個人的見解として、「日本という国
は、遠いヨーロッパからキリスト教が伝
わってきた、ある意味「末端、」であり、
教派間の争いがなく、「一致協力も非常
にやりやすい場ではないか」と主張した。
(キ25日付)

◇ 沈黙から和解の福音へ「テゼ共同体」の
ブラザー迎え懇談会

テゼ共同体のブラザー・ギランを招いた
懇談会が11月28日、日基教団神戸栄光
教会で行われた。日基教団、ルター派、
聖公会、バプテスト、カトリックと幅
広い教派から、特に若者への宣教に携
わる約20人の司祭、牧師、チャプレ
ンらが集った。打樋啓史（関西学院
大学教授・宗教主事）、中道基夫（同
大教授）の両氏が呼びかけ人となり、
打樋氏が通訳を務めた。

テゼ共同体はフランスのエキュメニカ
ルな男子修道会で、すでに30年以上前
から毎年、修道会よりギラン氏が派遣
され、日本の諸教会との関係を深めて
きた。また設立以来、全世界の若者
（20代までの青少年）の渇きに答
えるべく、目に見える和解のしるし
であることを目指してきた。懇談会
は今の若者が何を求めているのか、
何に渇いているのか、というギラン
氏の問いかけに答える形で始まった。
テゼ共同体での滞在を経験した参加
者は、「テゼにあって日本の教会に
ないものは沈黙だと思います。若
者は、ずっと沈黙に入ることができる
が、年配者が沈黙することが難
しい」と語る。若者の教会離れ、
超高齢化社会を迎えた日本なら
では、現場に密着した声だ。「若
者を教えるのではなく、若者の表
現に傾聴する存在となることが、
われわれ大人に求められているこ
とではないでしょうか」。

ギラン氏の答えに会場が頷いた。仕事や学校、それぞれに忙しくしているとわたしたちは沈黙の価値を忘れてしまう。しかし、沈黙することで、内なる畏れに気付いていく。ただ神のみ前に沈黙する時にこそ、自らの存在の本質と向き合うことができる、とギラン氏は語った。

懇談会は、単純素朴で、しかし美しい旋律のテゼの賛美が会場を包んで幕を下ろした。

テゼ共同体はプロテスタント出身のブラザー・ロジェによって創始された共同体。初期キリスト教の伝統に深く根差して詩篇を歌う一方で同時に多様な言語と文化と伝統を持つ若者たちが共有できる典礼様式を発展させてきた。現在、プロテスタントとカトリックの修道士たちが約100人、世界各国から集まり祈りと労働の日々を過ごしている。過去には、ローマ教皇の訪問を受け、正教学者のオリヴィエ・クレマンや哲学者ポール・リクールが滞在した。また毎年何万人という若者がテゼでの黙想を目的に訪れている。

日本との関わりも深い。JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）とは、バングラデシュにおける少数民族の教育支援を行っている。また知的障がい者と共に歩むラルシュとも協力関係にある。あらゆる垣根を越えて「常に福音の核心に目を注ぎ、一步一步、バランスと冒険を引き寄せながら歩き続ける」様子は、「小さくされている人々と一緒に福音の譬え話を紡ぎ出」している（黙想と祈りの集い準備会 編『テゼ Taize' 巡礼者の覚書』一麦出版社）。

来年テゼ共同体は、創立75周年を迎える。テゼ共同体が沈黙の中から見出し体現してきた和解の福音の光が、今、静かに日本の諸教会に灯りつつある。（キ25日付）

◇ いのちの尊厳、確立するために 聖学院大と韓国・長老会神学大がシンポ

東日本大震災と原発事故、また韓国の旅客船セウォル号沈没事故を受けて、「いのちの尊厳の確立」が日韓両国にとって緊要の課題であるとして、聖学院大学は、同学提携校の韓国・長老会神学大より尹哲昊（ユン・ Cholho）教授と、朴成奎（パク・ソンギョ）

助教授を招き、日韓神学シンポジウム「いのちの尊厳の確立」を11月7日に開催した。100人が参加した。

セッションIでは、窪寺俊之氏（聖学院大学大学院教授）が「傷付いた魂へのスピリチュアルケア」と題して講演し、尹氏がコメントを述べた。窪寺氏は、東日本大震災の被災地で日本の宗教者が立場を超えて働きを共にしていることは、「宗教家によるケア」であって「宗教的ケア」とは異なると指摘。「宗教家の祈祷や読経によって、亡くなった人はこの世からあの世に移ることができたと実感できて、生き残った人の悲しみが鎮まった」とし、宗教家の存在の意義を強調した。

その上で、「大震災、津波、原発事故は既存の価値観や世界観を破壊したので、人は新しい人生の土台をスピリチュアルなものに求めた」と解説。スピリチュアルケアとは、「宗教的教理や制度を超えて、痛んでいる人に寄り添い、その人のスピリチュアリティ（人生の基盤）を支えながら、一歩ずつ進むこと」だとして、宗教的ケアとの違いを明らかにした。さらに、スピリチュアルケアによる癒しのわざは、「分裂や対立、憎しみと暴力、紛争と戦争の悲劇を作り替えて、理解と和解、協力と助け合いという再生の物語を生み出す」と述べ、「より広い視野と世界観に立つ、平和を創り出す可能性をスピリチュアリティの中に見ることができる」と語った。

尹氏は、人間の「霊的癒し（スピリチュアルケア）」は人間の罪の悔い改めと神による罪の赦しから来るとし、震災や津波などの災難により苦しみを受けている人々への霊的な癒しも、「神の霊にあって神の霊を通してのみ可能となる」と主張。また、キリスト者が行う霊的ケアは宗派的な宗教的治療となる必要はないとしつつ、「彼らを神との関係において導く必要がある」と強調。「われわれはすべて『癒された癒し人』として他の人の傷や苦しみを治療する働きへと召されている」と述べた。さらに霊的癒しの原理は共感的愛だとして、「聖霊の力が共感的愛において隣人の苦しみと悲しみを共にするわれわれを通して現れるところに、霊的癒しと救いの働きが起こる」と応答した。

各雑誌記事から
【2014年10月～12月】

これを受けて窪寺氏は、スピリチュアリティには、特殊性（キリスト教のスピリチュアリティ）と普遍性（すべての宗教を含む神秘的な世界）があると、尹氏の指摘は前者であるとして賛同しつつも、これを強調すると相手を排除することになると指摘。後者の意味で理解することによって、「お互いの相違や壁を取り除いて、一致点を見つけることができるのではないか」と意見を述べた。

（キ25日付）

（カ：カトリック新聞、キ：キリスト新聞、ク：クリスチャン新聞、聖：聖公会新聞）

【文責：柴田 初男】

10月

「百万人の福音」

◇ 特集：「神の国」を夢見た男ヴォーリス

1. ヴォーリスの原点・近江八幡を訪ねて、2. 夢見る男を支えた妻 一柳満喜子、3. ヴォーリス建物カタログ、4. ヴォーリス語録、5. 神の国を祈り求めたヴォーリスが見たもの、

◇ 旬人彩人：「世界の宝といえる歌手に出会って」輪嶋東太郎 ボディゴスペルトレーナー R I E、◇ あしあと：「閉ざされた時に開いた道」あけぼのコミュニティー教会主管牧師 櫻井実、◇ 連載：①クリスチャン弁護士の日々思うこと、②黒田官兵衛とキリシタン大名、③明日へのピクニック、④塩狩峠、⑤風は思いのままに吹く、⑥「パンプキンパイ」、⑦光の中で色づいて、⑧ハイジ、⑨いのちの砦

「信徒の友」

◇ 特集：キリスト教学校と教会

1. 伝道の最前線基地のひとつとして、2. 真宗王国に立つ「ミッション」の働き、3. 訪ねてきた生徒の居場所に、4. 教会が学校生活の支え、◇ 特別読物：①沖縄から見た正義と平和、②証言 原発と言う差別、◇ 連載：①祈りの大地、②みことばにきく、③あらすじで読むキリスト教文学、④山上の説教を読む、⑤旬を楽しむスローフード、⑥聖なる光と祈りの空間、⑦シネマへの招待『リスボンに誘われて』、⑧がんと生きる、⑨臨床宗教師が被災地で考えたこと、⑩コーリヤンの大地から、⑪神に呼ばれて、⑫信仰から考える依存と依存症の境界線

「福音と世界」

◇ 特集：国家を神学する——我らの国籍はいずこに？

1. 安部首相はなぜかくも高揚しているのでしょうか、2. 「ナショナル」と「グローバル」のはざま、3. 国民国家とどのように向き合



うべきなのか、4. 狭間に生きる移民の視点から、5. 神のしもべ、6. 第30回「教会と国家」セミナー宣言、7. 都市は希望の場所ですか?、◇インタビュー：韓国における「小さい教会」運動

「舟の右側」

◇ 特集:人を恐れることからの開放

1. 人前であがらずに話す方法、2. 無きに等しい者を、なぜ、3. 「聖なる緊張感」を持つために、◇レポート：広島土砂災害 1. 機能した教会間ネットワーク、2. 次の大規模災害に備える地域教会ネットワークの構築、◇連載：1. 神様に呼ばれてどこまでも、2. キングダム・ミッション、2. 仕事の神学、3. 教会成長ここがポイント、4. 世にも偉大なミニストリーそれは子育て!、5. ジャンル別新約聖書解釈入門、6. 人を育てる教育、7. 求道者伝道についての提言 その3、8. お金と教会

「HAZAH」

◇ 特集:七つの山 I クリスマンと政治 後半

1. クリスマン政党を作ることだけが解決ではない、2. キリストの心で仕える、3. 政治問題に取り組む資格(2)、4. 創造と福音、5. 耐え忍んで実を結ぶ、6. ジャパン・ギャザリング in 沖縄、7. ダビデの幕屋の回復、8. 三度死んで天国へ行く③、9. 大丈夫イザヤの第二部『リバイバル考』⑤、10. 愛とロマンの地へ、11. イザヤが預言した島々の栄光2、12. 著者を囲む会：「日本宣教の突破口」、13. ふうけもん 全国縦断上映を迎えて、14. 新しい時代のための油注ぎ、15. 罪人の友

「福音宣教」

◇ 特集:希望への物語9・隔ての壁を崩した震災

1. 混沌からの再出発、2. 気がついたら開かれていた—木田まゆみ氏に聞く、3. 臨床宗教師の働きと、宗教者の本来的な役割、◇フォーラム：1. 追悼 奥村一郎師「相互愛の心」2. 筆に祈りを託して—画家に聞く⑤：石原新三さん、◇連載：①森の人びととともに—カメルーンから、②宣教と司牧の十字路にて—ある主任司祭の航跡「聖人と教会

のかかわり」、③存在の根を探して—キリスト教の基本を探る「生きるイエスを探し続ける教会」、④高齢者になって、⑤喜びを選ぶ、⑥主のみ前に一人で立つ

「羊群」

◇ 特集:聖書のタイムマネジメント

1. 特別寄港：使命に生きると時間がワクワクする、◇連載：①日韓の架け橋となったキリスト者たち：織田櫓次、②イエスの39のみ名：ことば、③救われる人は決まっているのにどうして伝道するの？

「あけぼの」

◇ 特集:結婚の不思議

1. (対談)結婚は不思議な出会い、2. 美しい誤解、3. 失われることばに抗して、4. 結婚の不思議、5. 結婚と子どもたち、◇連載：①シネマの窓、②アジアに生きる：戦争の後遺症と障がい児たち、③初源のふたり、④沈黙、⑤活憲といのち、⑥イエスが教えた祈り、⑦日中の近親憎悪をキリストの目で見ると、⑧北京幻影のちの歴史のなかで思、⑨子どもの貧困問題と学力、⑩みことばの旅

11月

「Ministry」

◇ 特集:新しい賛美のカタチ

1. 牧師 ROCKS、2. メイキング・オブ・賛美「これさん」と「滝山教会」の場合、3. 新しい歌を歌おう、4. ジャズ礼拝の試み、5. まとめに代えて—新しい歌が世界を変える、6. 牧師 ROCKS 祝☆CD 発売記念座談会
◇ 5億6千万人のキリスト者の声を官邸に、
◇ 人物で見る中国キリスト教、◇ 生存権と生活保護制度、◇ 脳内紅白歌合戦、◇ 礼拝の祈り①祈れない、◇ 牧師たちの日常、◇ イスラエル発掘調査50周年記念対談、◇ 礼拝改革試論(1)~その前提と考え方、◇ 葬儀礼拝~神の出来事として、◇ 私の教会を「自己評価」してみる、◇ インターネットで礼拝を配信しよう<発信編>、◇ 第31回ヨーロッパ・キリスト者の集い

「百万人の福音」

◇ 特集:岡山とキリスト教

1. 岡山まちあるき、2. レポート:サムエル国際キリスト教学園、3. 岡山四聖徒:アリス・ペティ・アダムス、石井十次、留岡幸助、山室軍平、4. 岡山のキリスト教史、◇ 旬人彩人:「大切な人」とのよりよい関係のために、『M&F Relations』代表 木村宣貴、◇ あしあと:「教会開拓とDV問題対応でキリストに仕える」栗原加代美

「信徒の友」

◇ 特集:アイデンティティー 若者の選択

1. 悩めるあなたに語る人間回復論、2. 俳優という生き方、3. 画家として立つ、4. 命を与える場に集う、◇ 特別読物:①ゴスペル・ブームを教会はどう考える?、②沖縄・平良川伝道所、③証言 原発という差別、◇ 連載:①臨床宗教師が被災地で考えたこと、②戦争の歴史の継承と私たちの役割

「福音と世界」

◇ 特集:救いを神学する——なにからの、なにへの?

1. パウロにとっての「救い」—N・T・ライトの視点を通じ、2. ある墮地獄者も証し—J・J・スランに寄せて、3. シモーヌ・ヴェイユにとって「救済」とは、4. 謙遜の内にある救い、5. クィア神学への誘い—性の多様性から神を見る6. この地上に永続する都を持っておらず

「舟の右側」

◇ 特集:新しいコミュニティの創造

1. 「ソーシャルワーク」から「ソーシャルアクション」へ、2. 「社会的責任」から「社会貢献」へ、◇ インタビュー:牧師として、スクールカウンセラーとして、◇ 連載:1. 被造物管理の神学シリーズ その1、2. 仕事の神学、3. 世にも偉大なミニストリー それは子育て、4. 人を育てる教育、5. 教会次世代の「事情・心情・波乱万丈」その1

「HAZAH」

◇ 特集:七つの山 I キリシヤンと政治③

1. 震災後に迎える日本の未来を方向付ける福島県知事選、2. 政治問題に取り組む資格(3)、◇ 連載:1. 創造と福音、2. ジャパン・ギャザリング in 沖縄、3. 愛とロマンの地へ アルゼンチンリバイバル、4. 日本民族総福音化運動協議会 第二回フォーラム

「福音宣教 11」

◇ 特集:希望への物語10・震災で神と出会う

1. 疑念から確信へ、2. 懐疑から信仰への歩み、3. 震災で何を見たか、◇ フォーラム:1. 筆に祈りを託して—晴佐久昌英師の「芸術的感性で伝える福音」、2. 追悼 佐久間彪師、◇ 連載:①宣教と司牧の十字路にて—ある主任司祭の航跡「新たないのちの門をくぐる時」、②存在の根を探して—キリスト教の基本を探る「キリストを生きる生活基盤」、③私の発達障害と信仰「理解者と協力者」、④人をつなぐ神の知恵「恐れと親しさ」

「福音と社会 No. 276」

◇ チャーチナウ:1. 「家庭」テーマのシノドスが残した亀裂の舞台裏、2. 人間の尊厳無視する“テロ集団”は人類の敵、◇ レポート:ラオスに学校を作ろうプロジェクト同行記、◇ 読者の考察:日本が「核の傘」を抜けるべき基本的な理由、◇ 読者の考察:教会生活が、発達障害者の発育暦や社会参加に及ぼす影響

「羊群」

◇ 特別寄稿:サーバント・リーダーシップ考

◇ 連載:1. 日韓の架け橋となったキリスト者たち「栞富安左衛門」、2. キリスト教について本当のことを知りたい、3. イエスの39のみ名

「礼拝と音楽」

◇ 特集:現代の教会音楽

1. 現代の教会音楽、2. ジョン・ラターの礼拝のための合唱曲、3. 二十世紀後半から現代までのヨーロッパのオルガン作品、4. 現代社会とキリスト教音楽、5. 時代を抱きしめる音楽、6. 奏楽用楽譜紹介

「あけぼの」

◇ 特集: “いのち”を想うー過ぎ越しのときに

1. (対談)家での看取りー自分、人、そして神と和解する場、2. 「死ぬことと、生きることは同じ」亡き夫が至った死生観とは、3. 在宅ホスピスの現場より、4. 穏やかに「ありがとう」の言葉を遺して旅たつところ、5. 逝く人・送る人、◇連載: 1. アジアに生きる、2. ミステリアスな日々、3. 時の岸辺にて、4. 活憲といのち、5. キリストの愛を日本と中国に、6. 子育て塾

12月

「百万人の福音」

◇ 特集: 日本人のクリスマス

幸せを感じるクリスマス/日本のクリスマス小史/手づくりのクリスマス/日本社会のクリスマスにキリストのいのちを、◇ 旬人彩人: 祈りつつ、愛しつつ、子どもの隣に、添い続ける「光の子どもの家」理事長 菅原哲男、◇ この町、この教会: 茅野キリスト教会、◇ あしあと: 神の創造性を受けてデザイン重視の建物を提案 総合不動産建設業社長 奥田英男、

「信徒の友」

◇ 特集: ここにもクリスマスはやってくる キリストの受肉

1. 苦しみを共に負う、2. 暗闇に見出した光のメッセージ、①ガザ 紛争の陰で、②沖縄戦争の傷跡、③宮城 津波被害の地から、3. 写真家が選んだ“クリスマスにこの1枚”、◇ 三浦綾子の世界を訪ねて、◇ 『信徒の友』創刊50周年記念「感謝礼拝・ライブ&トーク大阪」開催される、◇ 証言 原発という差別、◇ 全国に広がる「がん哲学外来」、◇ 献堂しました: 掛川教会、◇ 祈りの大地、◇ 臨床宗教士が被災地で考えたこと、◇ 神に呼ばれて、◇ IN Society: 関東大震災の隠された出来事に向き合う

「福音と世界」

◇ 特集: 終末を神学するー真の希望のために

1 レヴィナスの時間論、2. 御子にこの希望をかけてーヨーダー「終末論なき平和？」再読、3. 典礼と終末、4. それは希望ではなかったのか? ユーカリストからの反論、5. 「終わりの時」の実存的意義、6. 終末論と資本主義、◇ 人と共に生きた「弧墳のひと」『柏木義円資料集』の意義

「舟の右側」

◇ メッセージ: 「福音中心の生活」「福音中心のミニストリー」ジョン・パイパー氏、◇ インタビュー: かがみこんで下さる聖霊と共に、深谷美枝さん、◇ 短期連載: 宗教改革の精神 その1 恩寵のみ・信仰のみ、◇ 連載: ①被造物管理の神学シリーズ その2、②神様に呼ばれてどこまでも、③キングダム・ミッション 新井建設社長 新井与四和、④教会成長ここがポイント、⑤仕事の神学、⑥世にも偉大なミニストリー それは子育て、⑦人を育てる教育、⑧教会次世代の「事情・心情・波乱万丈」その2、⑨お金と教会

「HAZAH」

◇ 特集: 七つの山 II クリスチャンとビジネス①

1. 日本の社会起業家リーダーによる平和構築と社会改革、2. 日本宣教の現状とビジネスマン伝道の課題、◇連載: 1. 本文批評学の中の光と闇 8、2. 大丈夫イザヤの第二部『リバイバル考』最終回、3. 創造と福音、4. 中国教会はなぜリバイバルしたのか(中)、5. ダビデの幕屋の回復、6. 今聖霊が教会に語っておられること 8、仮庵の祭り、7. 愛とロマンの地へ、8. 海外宣教&リバイバル便り②、9. 悔い改めの説教で何が起こるか?

「福音宣教 12」

◇ 特集: 希望への物語 最終回・震災を経て、未来を展望する

1. 福音の証に生きる日本の教会、2. 人びとの必要に応える教会になるために、3. 私たちの社会に希望はあるか、◇ フォーラム: 旧ザビエル記念聖堂移築から一年を迎えて、

◇連載：①宣教と司牧の十字路にて－幼子の心にかみ宿る、②存在の根を探して－キリスト教の基本を探る「心の深い深い、いちばんの奥底へ」、③私の発達障害と信仰「私の信仰を振り返る」、④人をつなぐ神の知恵「希望のかけ橋」

「羊群」

◇ 特別寄稿：批判と感謝

◇ 連載：1. 日韓の架け橋となったキリスト者たち 西田昌一、2. イエスのたとえ話、3. キリスト教について本当のことを知りたい

「あけぼの」

◇ 特集：聖夜－“闇”のなかに輝く“光”

1. (対談)人々の中に生まれ、ともにいる神－キリスト・イエス、2. だからあのクリスマスは美しかった、3. イエスの誕生－闇に輝く光、4. 神さまが送られた光り輝くみどり児、5. 傷ついた人から癒す人へ－闇の中の光－、◇連載：1. アジアに生きる、2. ミステリアスな日々、3. 時の岸辺にて、4. 活憲といのち、5. キリストの愛を日本と中国に、6. 子育て塾



各教団・教派、宣教団体の 機関紙・ニュースから

10月

「教団新報 NO. 4807 10/11」

(日本基督教団)

1. 『信徒の友』創刊50周年、2. 宣教委員会：統一原理問題等、申し送り事項を確認、3. 教区青年担当者会：教団に青年担当部門の設置を、4. 障がいを考える全国交流会：牧会者とその家族の精神的ケア、5. 救援対策本部会議：今総会期最終の本部会議を行う、6. 伝道委員会：委員会活動、見直しの時期に、7. 日本基督教団・在日大韓基督教会協約締結30周年記念集会：協約のこれまで・今・これからを協議、8. 伝道報告：伝道と教会形成は同じ方向性を持つ

「教団新報 NO. 4808-9 10/25」

(日本基督教団)

1. 2014年 秋季教師検定試験、2. 予算決算委員会、3. 全国財務委員長会議、4. 教区活動連帯金配分協議会、5. 社会委員会、6. 伝道推進室主催「三重伝道キャラバン・名古屋大会」、7. 世界宣教委員会、8. 年金特集：①2013年度日本基督教団年金局決算報告、②年金局決算概況、9. 引退教師近況、10. 「引退牧師を支える運動」推進委員会、11. 伝道報告、12. 人ひととき

「キリスト教学校教育 NO. 677 10/15」

(キリスト教学校教育同盟)

1. 第56回学校代表者協議会：キリスト教主義学校におけるキリスト教教育の尊属の危機に際して、2. 第1回中堅教員リトリート（節目研修）、3. 第1回大学新任教員研修会、4. 第4回西日本小学校教職員協議会、5. 第4回中堅事務職員研修会、6. 各地区の夏期行事：①西南地区、②関西地区、③関東地区、④東北・北海道地区、7. キリスト教教育者物語②・(21)、8. 加盟校(98法人)学生・生徒・児童・教職員数、9. キリスト教Q&A

「世の光 NO. 769」 (日本同盟基督教団)

1. 社会厚生部：広島大規模土砂災害被害者報告及びボランティア活動報告、2. 教職教育部：2014年補教師研修会報告、3. カルト問題対策委員会：なぜ、エホバの証人を『異端』と言えるのか、◇となり人 社会厚生部日より 第56号、◇ 国外宣教 NO. 452、1. 国外宣教部設立の前後記（前編）、2. お茶の間世界宣教（モンゴル）、3. ティーンエイジャーの救い（ブラジル）

「JHC Revival 792号」 (日本ホーリネス教団)

1. 次世代育成—育つ喜び、育てる喜び—中京教区編、2. チーム青年伝道、3. 「福音の喜びに共に生きるホーリネス」2014年度全国夏季聖会報告、4. 2014年度キャンプ委員会 教団主催キャンプ報告、5. 宣教局ニュース：国外宣教「なぜ宣教師になったの?」、6. 教育局だより：第4回勸士志願者及び勸士説教セミナー報告、7. 教団本部ニュース

「イムヌエル教報 NO. 819」 (イムヌエル総合伝道団)

1. 広島土砂災害の中でお祈りに感謝します、2. 選挙管理委員会から、3. 創立70周年記念事業「出版と記念大会」、4. 第7回中高生キャンプ「とにキャン」、5. 原発問題を考える「原発再稼働の妥当性を問う(1)」、6. 国内教会局から、7. 海外トピックス、8. 教団運営委員会から、9. 出版事業部から、10. 世界宣教局：ザンビア、ボリビア、ケニア・テヌウェク、11. 聖宣神学院報、12. 公報・消息

「JCCJtimes NO. 743」 (日本イエス・キリスト教団 時報)

1. バイブルキャンプ報告：①大阪教区、②信越・京都教区、2. 会堂建築の祈り：浜松真愛教会、3. 会堂購入の経過：鹿児島めぐみ教会、4. 牧師館完成の報告：大久保めぐみ教会、5. 公報・消息

「KINGDOM NO. 604」 (基督聖協団)

1. エンドタイム・ビジョンへの挑戦、2. キッズキャンプでの証、3. 餃子キャンプの恵み、4. 教会形成部会の歩み、5. 報告創立70周年記念

「アッセンブリー News NO. 709」 (日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き (53)、2. 紹介 国内伝道部、3. 第7回世界アッセンブリー大会報告、4. 夏のキャンプレポート：①北海道地区、②東北地区、③関東南西地区、④東海地区、⑤北陸地区、⑥関西地区、⑦四国地区、⑧九州地区、⑨沖縄地区、5. クリスチャン・ビジネスパースン vol. 10

「協力 NO. 82」 (伝道団体連絡協議会)

1. 伝道協フェスティバル開催、2. 加盟団体の紹介：①One Hope、②FNDC 福音ネット伝道協力会、3. 加盟団体の近況・祈りの課題

11月

「教団新報 NO. 4810 11/29」 (日本基督教団)

1. 第39会 日本基督教団総会：伝道する教団の建設—信仰の一致に基づく伝道の推進—、2. 報告：①教会中高生・青年大会2014、②東日本大震災救援募金及び被災教会復興と被災地支援活動、3. 伝道協力する多くの兄弟姉妹から励まし—来賓挨拶—

「キリスト教学校教育 NO. 678 11/15」 (キリスト教学校教育同盟)

1. キリスト教学校教育同盟 一般社団法人へ移行、2. レポート：①第58回大学部会研究集会、②第56回中高研究集会、③第6回キリスト教活動担当事務職員研修会、④関西地区第58回大学部会研究集会、3. 教育同盟編中高聖書教科書の全面改訂について

「世の光 NO. 770」 (日本同盟基督教団)

1. 献堂の恵み：円山聖書教会、2. 「教会と国家」委員会：8/15 平和祈禱会報告、3. 教会支援部：教会支援キャラバンの恵み、4. 救いの証し：感謝をもって生きる、5. 宣教区：関東宣教区、6. 恵流：からし種の集大成、7. 教会紹介：市原平安教会、川西聖書教会、武庫之荘めぐみ教会、◇国内宣教 NO.174、1. 十勝めぐみ教会開拓物語、2. キャラバン伝道の恵み、3. 世界宣教大会伝道局主催分科会報告、◇国外宣教 NO.453、1. 国外宣教部設立の前後記(後編)、2. 中国語教会との出会い、3. マイワ語聖書翻訳、4. 来台湾5年、子ども達の近況、5. 宣教師近況・祈禱課題

「JECA フォーラム NO. 93」

(日本福音キリスト教会連合)

1. 開拓伝道、新しい教会を生み出すには、2. 福岡開拓のこれまでと「今」、3. 新しい讃美歌の魅力、5. 地区聖会の報告

「イムヌエル教報 NO. 820」

(イムヌエル総合伝道団)

1. 次の世代に主の大能のわざを、2. 選挙管理委員会から 総会代議員選出選挙公報、3. 第13回静岡聖会：普段着の聖徒たち、4. 厚生委員会から：「謝恩日聖日」の感謝、5. 原発問題を考える、6. 国内教会局から、7. 関東聖化大会報告、8. 公報：本部通達、9. 消息報告、◇広げた翼：世界宣教局、1. ケニヤ・テヌウェク、2. 台湾、3. ザンビア、◇聖宣神学院報、1. いまどきの聖書信仰2、2. 信徒公開講座に参加して、

「JHC Revival 793号」

(日本ホーリネス教団)

1. 次世代育成ー育つ喜び、育てる喜びー中国教区編、2. 2014年度全国秋季聖会報告：「福音の喜びに共に生きるホーリネス」、3. 女性教職者と牧師夫人の会、4. 宣教局ニュース：①国内宣教、②国外宣教、5. ネヘミヤ・プロジェクト報告：建築計画概要、6. 学院から：

「聖書学院の秋」、7. 「普通の国」になるべきか、8. 教団本部ニュース

「JCCJtimes NO. 744」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. 教区だより ①東北教区：壮年部交わり会、②関東教区：研修会、③信越教区：CS教師研修会、④大阪教区：婦人部研修会、⑤兵庫教区：婦人部大塚国際美術館見学バスツアー、⑥中国教区：婦人部親睦例会、⑦四国教区：伝道応援、⑧九州教区：信徒大会、2. 公報・消息

「アッセンブリー News NO. 710」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き(54)、2. 中央聖書神学校(CBC)掲示板、3. 秋の教区聖会レポート：①北海道教区、②関東南西教区西地区、③関西教区、④九州教区、4. ろう者聖会・入学式、5. 特集：クリスマスをお祝い、6. 読者の投稿広場(2)、7. 新卒レポート：神に仕える、8. 新・祈りのコラム7、9. クリスマン・ビジネスパーソン vol.11：主とともに、教会とともに

「日本宣教会ニュースレター 第11号」

(日本宣教会)

- ◇第9回 全国研究会 発表内容の概要紹介、1. 基調講演：「最近の福音宣教に対する声明比較と分析」、2. 研究発表1：WCCにおける宣教・伝道論、3. 研究発表2：キリストと兄弟を愛するように教えてくれた友人 ジョヴァンニ・リヴァ、4. 研究発表3：ノン・クリスチアンの神義論的疑問にいかにして応答すべきか?、5. 研究発表4：羽仁もと子と「全国友の会」、2. 学会ニュース

12月

「教団新報 NO. 4811-12 12/20」

(日本基督教団)

1. 第39総会期 第1回 常議員会：伝道資金申請・交付のための手続きを決定、2. 第38総会期宣教委員会：台湾訪問、宣教力に触れる、

3. 部落解放センター／ドイツ訪問報告：シン
ティ・ロマ差別について研修

「キリスト教学校教育 NO. 679 12/15」

(キリスト教学校教育同盟)

1. これまでの「教育同盟」と「一般社団法人
としての教育同盟」とは、どこが違うのか
(Q&A)、2. レポート：①東北・北海道地区
教研集會中高部会、②関東地区 第31回中高研
究集會、③関西地区 新人教師研修會、3. 村
岡花子と山梨英和学院

「世の光 NO. 771」

(日本同盟基督教団)

1. 宣教区：東京宣教区紹介、2. 教会紹
介：館山教会、3. 恵流：会計担当者の独白、
4. 教団ニュース、5. 信仰告白：教団信仰
告白の解説その⑥、6. 信望愛：失敗する事
を恐れず、◇ 国内宣教：1. これからの国内
宣教ビジョン、2. 国内宣教 Q&A、3. 教会開
拓は前進しています！、4. 国内宣教献金感
謝します、◇ 国外宣教 N0454：1. モンゴル、
2. ブラジル、3. 宣教師近況・祈禱課題、
4. 2014世界宣教大会 感謝報告

「イムヌエル教報 NO. 821」

(イムヌエル綜合伝道団)

1. 教団創立70周年 青年大会に向けて 青年
からの提言 その1：変貌する世界の中で 次
の時代へのビジョンを描く、2. 教団運営委員
会から：第19次総会期での最後の運営委員会、
3. 日本福音連名理事会、4. 第28回沖縄聖
会：みことばに聴く生活、5. 海外トピックス、
6. 国内教会局から：伝道サポートシステム報
告、7. 世界宣教局・局員会から：ザンビアの
宣教師館、ボリビアへの訪問団、8. 広げた
翼：世界宣教局、9. 聖宣神学院報、8. 公
報：本部通達

「JHC Revival 794号」

(日本ホーリネス教団)

1. 次世代育成ー育つ喜び、育てる喜びー四
国教区編①、2. わが教会のクリスマス2014、
3. ユースジャム2016へ向けて、4. 宣教局
ニュース (国内宣教、国外宣教)、5. 奉仕

局セミナー報告：「今・地域で自分ができる
ことは何？」、6. 東京聖書学院PR、7.
レイマンの声、8. 教団本部ニュース

「JCCJtimes NO. 745」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. 第47回教団牧師研修會、2. 教区だより
①東北教区：「合同研修會」、②関東教区：
「新しい歌を、新しい會堂で！」、③京都教
区：「壯年部修養會」、④大阪教区：「ハロ
スマ」、⑤兵庫教区：「役員研修會」、⑥四
国教区：「信徒大會」、3. 公報・消息4.
天橋立聖會「感謝の報告」

「アッセンブリー News NO. 711」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 2015年第40回全国聖會講師から、2. 秋の
教区聖會レポート：①東北教区、②北陸教区、
③中国教区、④四国教区、3. 震災特集：教団
復興支援報告 2014下半期東北復興委員會、3.
イスラエル公認ガイドが教える穴場スポット③
ヘロディオン、4. 新卒レポート：神に仕え
る、5. 新・祈りのコラム8、5. クリスチ
ャン・ビジネスパースン vol.12：祈り仕える

Japan Harvest Volume 65 No. 5

(Japan Evangelical Missionary Association)

◇ 特集 Who Are We ?

Member Missions (団体の自己紹介)

1. Act Beyond (アクト ビヨンド)
2. Agape Mission (アガペ宣教會)
3. Asian Access (アジアアクセス)
4. The Christian and Missionary Alliance,
Japan Mission (日本アライアンス・ミッシ
ョン)
5. Christian Reformed Japan Mission
(基督教改革派日本宣教會)
6. Evangelical Covenant Church
(日本聖契キリスト教団)
7. Japan Baptist Fellowship
(保守バプテスト日本宣教會)
8. Japan Christian Link
(ジャパン・クリスチャン・リンク)
9. Overseas Missionary Fellowship
(国際福音宣教會)

10. Reaching Japan Together Association
(リーチング・ジャパン・トゥギャザー)
11. The Evangelical Alliance Mission
(日本同盟基督教団)

◇ 一般論文

1. Breaking Out (難関突破-思考のレベルの戦いに勝つ)
2. Transforming the Hikikomori (引きこもりの人を解決する)
3. Prayer & Evangelism (祈りと伝道)

【和訳：花菌 征夫】

神学校のニュースから

10月

「関西聖書神学校 KBC NEWS vol.08」

1. ミャンマーにおける短期海外宣教旅行、
2. 第80回塩屋聖会、3. 後援会だより「人口減ニッポンとキリスト教会」

11月

12月

「東京基督教大学大学報 147号」

◇ 特集：グローバル化するTCUキャンパス

1. アジア神学コース (Asian Christian Theological Studies for English Speakers: ACTS-ES)、
2. 短期留学コース (East Asia Institute: EAI)、
3. TCUから海外へ、
4. 神学科・大学院：大学院の特別セミナー、
5. 教会音楽：第43回夏期教会音楽講習会報告、
6. 国際キリスト教学専攻：教員のコラム、
7. キリスト教福祉学専攻：どうしてTCUの教員になったのですか？、
7. ニュース：夏期伝道報告、岡山エクステンション、シオン祭報告、ボランティアセンター報告、『小畑進著作集』出版記念感謝会、
8. 卒業生からの手紙、
9. 支援会ニュース、
10. 祈りのコンサート報告

「聖書宣教会通信 159号」

1. 聖書神学舎から、
2. リトリートの報告と感謝、
3. リトリートのメッセージから、
4. 「図書館から」



各学術雑誌の記事から

「改革派神学 第41号」

(神戸改革派神学校・2014.10)

◇ 市川康則校長退職記念号

[最終講義] 1. 創造の郷里の意義—宣教論的課題としての“冠婚葬祭”との関連で—、

[講演] 1. “魂の医者”を育てる、2. 国家に対するキリスト者の良心、[論文] 1. 第二スイス信仰告白の聖書論—聖書・説教・説教者を巡って—、2. アグスィヌス「告白」における、神—キリスト—わたし(1)、3. 改革派正統主義時代における神学の方法と基本的性格、4. 20世紀のオランダ改革派神学とその現在、[論文] 万人祭司の教会形成—「万人祭司性の原理」の歴史的展開を振り返って

「宣教と神学 第36号」

(神戸ルーテル神学校・2014.12)

◇ 論文：1. 縄文とキリスト教、2. カクレキリシタンと日本宣教、3. 聖フランシスコと現代、4. 国家とキリスト教

「宗教研究 第88巻 第381号」

(日本宗教学会・2014.12)

◇ 論文：1. 近代日本における「宗教」概念の西洋的起源、2. 知識人の社会事業としての聖書研究、3. なぜ大学で宗教が学べるのか、4. 「占い・おまじない」と少女、5. 信念の倫理とプラグマティズム、6. ウィトゲンシュタインのキェルケゴール体験、7. グルジェフの祈祷論、8. ステインハルトの『幸福の日記』におけるエリアーデ宗教学に関する言及、9. ブーバー／ローゼンツヴァイク訳ヘブライ語聖書の諸特徴

「基督教研究 第76巻 第2号」

(同志社大学神学部基督教研究会・2014.12)

◇ 論文：1. 北森嘉蔵のシュライアマハー理解、2. 「聖霊」の系譜、3. ヒップホップの宗教的機能：ヒップホップ世代の救済観、4. ハルナックとレオ・ベック

「教会の神学 第21号」

(日本キリスト教会神学校・2014.10)

◇ 聖書・教理の公開講座：1. 旧約聖書「律法」、2. 教理「聖書論」、◇ カルヴァン・改革派神学研究所 講演：1. カルヴァン派の初期カテキズムの形態、◇ 論文：1. Loveの明治元訳「愛(いつくしみ)」と「仁愛」をめぐる、3. 聖霊論的思考について

「神学ダイジェスト 117号」

(上智大学神学会・2014.12)

◇ 特集：教会における信徒 1. 共同宣教司牧を通して、2. 「信徒」の概念、3. 第二バチカン公会議と信徒の登場、4. 教会における信徒、5. 使徒的勧告『信徒の召命と使命』、6. 霊の賜物とキリストの体、7. 信徒教会奉仕者の公認、8. これからの信徒教会奉仕職、9. 新しい「女性神学」について、10. 彼らはなぜ教会から離れたか？、11. 第3回 『正教神学概論』

「ヴィア・メディア 第9号」

(聖公会 ウィリアムス神学館紀要・2014.9)

◇ 論文：1. 「座る」イエス、2. 「公禱」とは何か、◇ ウィリアムス神学館創立65周年記念講演：20世紀初頭におけるアングリカニズム、日本と高度文明、◇ 2013年度卒業小論文要旨
◇ 2013年度ウィリアムス神学館報告



あとがき

2015年、新たな年を迎え、ここに第3号をお届けできますことを感謝致します。本年も、昨年に引き続き、どうぞよろしく願い申し上げます。

最近では、日刊紙を始めとして、ほとんどの新聞がオンライン化され、メールマガジンや電子版等で気軽に読めるようになりました。

そこで、日本宣教ニュースでは、キリスト教系の新聞記事からの掲載は、少し減らしているかと思っています。その分の埋め合わせではないのですが、他宗教に関する新聞記事の中から、目についたものを掲載してみました。図らずも、仏教等のあり方を批判する記事を掲載する結果となりましたが、他人事ではない感じがします。

マイケル・オー氏の講演にある「繁栄の福音」や教職者の不祥事・スキャンダルだけでなく、最近では正統的と言われるような教会においても、歪んだ支配や誤った権威主義によるカルト化等の問題も多発しています。これらキリスト教界の現状は、1%の壁をうんぬんする以前の問題として、深刻に受け止める必要があるように思います。

そしてそれらは、単に個人的な資質による問題として済みますのではなく、各個教会主義をいいことに、キリストの教会を私物化し易い構造的な問題もあるのではないのでしょうか。

一般企業においては企業統治や監査制度が発達していますが、キリスト教界においても全体的な問題として、主に在って互いに訓戒し合う関係の構築や組織的に自浄作用を働かす機能の構築等の整備もまた緊急の課題ではないかと思えます。

終わりに、東日本大震災後、単身で岩手県に移り住み、開拓伝道をされている婦人宣教師から聞いた言葉をご紹介します。

「知識がなければ、意識がない。

意識がなければ、働かない。」

(初穂)



東京基督教大学 国際宣教センター 日本宣教リサーチ 【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5
学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一(東京基督教大学大学院神学研究科委員長)
日本宣教リサーチ専門委員 柴田 初男、花蘭 征夫